
人間天使と性別人間

驟雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間・天使と性別・人間

【NZコード】

N6191Z

【作者名】

驟雨

【あらすじ】

「ごく普通の人間として、吸血鬼 グレイのパートナーを務めてきた佐川紅丞。だが、彼はある日、突然、人間を辞めてしまう……！？」 今回は性別・人間シリーズ4作目。前作「性別・人間と魔界少年」から見た方が多分わかりやすいかと。

プロローグ

「俺、お前の事が好きだ。」

……あの告白から、3ヶ月半くらいたつた頃。

告白された当の本人、安藤未来は、一向に返事を返してくれない。それどころか、暁文とグレイにベッタリなようだつた。

フラれたか？と思ったが、未来に限つて断りの返事を返してくれないのは、どうもおかしい。

あいつは、人一番正義感が強いんだ。返事なら必ず返してくれるはずだ。

でも、それがない。

まさか……忘れた？

自然消滅つて奴か？

そんな事……あるのか？

にわかには信じられない。でも、あり得ないとも言い切れない。

現に未来は、学校で俺と会つても、部活の話とか、グレイの話とかしかせず、告白の件については一タッチなのだ。

未来は、俺が告白したことを……忘れてるのか？

そうだとしたら、もし、そうだとしたら……もう一度、告白するべきなのだろうか？

……無理だ。

あの、胸の奥で、心臓が張り裂けそつになる緊張感……もつ今の俺には耐えられそうにない。

もう、諦めるしか無いのか……。

そんな風に、若干ネガティブになりかけていた俺、佐川紅丞こうすけ。
そんな俺は、ある日突然、人間を辞める羽目になつた。

プロローグ（後書き）

今回はまさかの紅丞視点。友人に宣伝していただけに、勝手にプレッシャー感じています。

……と、ここでとりあえず、主人公の紅丞についてちょっと説明を。

佐川紅丞

年齢：18歳、高校3年生（今作から）。11月30日生まれ。

身長：165センチ。

未来に告白した人物。見た目は学校で上位を争うイケメンだが、性格は打たれ弱く、涙弱く、女々しい。

こんなとこですね。身長165センチって高いんだか低いんだか判断ないです。

「んー……。」「

朝。眩しい朝日が部屋に容赦なく入り込み、俺は目を覚ました。
「眩しつ……。」「

そういえば、昨日、寝る前にカーテンを閉めるのを忘れていた。

「……寒い。」「

寒さに負けて、毛布をかぶる。

もう4月だが、北の大地はまだ寒い。

実は、1週間前から高3になつたのだ。
てことは、未来は高2。

……あと1年で、未来と離れてしまつ。

思えば、未来に恋をしたあたりから、進学活動とか、就活とかが全く眼中に無かつた。未来のことで頭がいっぱいだった。

「はあ……。」「

また今日も学校に行かねばならない。正直言つと面倒だが、いかなかつたら未来に怒られそうなので、早めに支度をする事にした。

部屋を出て、階段を降りてキッチンに行く。

「喉乾いた……。」「

キッチンに行き、蛇口を捻る。

水が 出ない。

「あ……水道工事で水出ないのか……。」「

家の近くで水道工事を行つてゐるため、現在我が家は断水中。仕方ないので冷蔵庫に何かないか探すこと。

「えーと、飲み物飲み物……何も無えな……。」「

近頃、買い物に行ってないせいで飲み物が一つ無かつた。

「どーすつかなあ……ん?」

ふと、冷蔵庫の隅に、銀色の瓶を見つけた。……大きさはだいたい、酒の一升瓶と同じくらい。

「なんだこれ……グレイのか?」

持ち上げてみると、物凄く重たい。多分、満杯状態なのだろう。

そういうば……以前、グレイが、俺の血をコツコツ貯めていりとか言つてたな。

「てことは、これ、俺の血か……。」

銀色の瓶をまじまじと見つめ、それを冷蔵庫から取り出す。

ふたを開け、そつと匂いを嗅いでみた。

……案の定、血の匂いがした。

「喉乾いてるし……別にいいか。」

まあ、俺の血なわけだし、飲んでしまつても、本体がいじこいるわけだから、怒られはしないか……。

瓶の中の血をコップには移さず、俺はそのままラップ飲みした。

「紅丞、おはよー。」

眠い目を擦りながら、グレイがキッキンに入ってきた。

キヨロキヨロとあたりを見渡し、俺の姿を見つけた。

「紅丞ー。何して……紅丞つ！？」

グレイは驚愕した。

そりやあ、そりやあ。せつかくコツコツ貯めてきた血を田の前で飲まれて、驚愕しない方が変だ。

でも、グレイが気付いたときにはすでに遅く、俺は瓶の中の血を一滴残らず飲み干してしまっていた。

「つ……ふう……。」

味は、やっぱり血の味がした。……でも、何かが変だつた。
何といふか、酸っぱいよ^ウうな、甘いよ^ウうな……人間の血つて、こん
な味だつたつけ?

疑問を感じつつ、ガントの机を飛ばす。

グレイの瞳は、真っ青になつていた。

「アーバン田舎者」の重門、アーバン田舎者、アーバン田舎者

「そ、うだナビ…………何だよ？ 別に全

「世俺の血なんだろ？」

「うう、五郎の母ちゃんが!!」

「はあ？ じゃあ誰のだよ？」

俺からの質問に
ケレイは俯きながら答えた。

ט' ט' ט' ט'

「だから……僕の血なんだよ。それ……。」

「グレイ、元談まやめろ。」

「… 本當だよ。」

あ 何で自分の血なんか照めてるんだよ

グレイの顔や瞳が、だんだん懐しみを帯びてきた。

そして、こんなことを言いだした。

「……紅丞、人間が二十歳になる前に吸血鬼の血を飲んでしまった
ら、人間じゃ無くなっちゃうかもしないんだよ？」

今度は俺が驚愕した。

「……え？ それって、どういうことだ？ 確か俺、グレイの血を飲んで
しまったわけだよな？ てことは……え？ 俺、人間じゃなくなっちゃ
うの？」

「……グレイ、ちょっと待つてくれ、それって、どういう……。」
衝撃の事実に、おびえた反応を見せる俺を後目に、グレイは淡々と
話し出した。

「……そのまんまの意味だよ。人間が吸血鬼の血を飲んでしまえば、
人間は、人間には無い力を手に入れる……つまり、人間じゃなくな
っちゃう……ってことだよ。」

「そ、それじゃあ、俺……。」

「でも、紅丞の場合は違う。……紅丞は僕の 天使と吸血鬼の血
を同時に、しかも大量に飲んじゃつたから、もしかしたら、命に関
わるような変化が出てしまうかもしれない……。」

「い、命……？」

「うん。……ハツキリ言うと……。」

グレイは少し言いにくそうな顔をした後、すぐに俺の目を見て、こ
う言った。

「もしかしたら、紅丞は……”天使”になっちゃうかもしれない。」

「……え？」

「俺が……”天使”？」

事故（後書き）

こいつではグレイについて軽く説明を。

グレイ

年齢：21歳。10月27日生まれ。

身長145センチ。

紅丞のパートナー。吸血鬼であり天使。一人称は「僕」だが、一応女の子。性格は泣き虫で甘えん坊だが我慢しがちなところがある。

キャラの誕生日、設定しました。

説明

僕の血は、その全体の約7割が天使の血で出来ている。

その血を、紅丞は”大量”に飲んでしまった。

確かに、成長過程の人間が吸血鬼の血を飲んでしまえば、人間では無くなってしまう。それは事実。

吸血鬼の血”だけ”を飲んだのなら、未来ちゃんのように、性別が増えたりするだけで済む。

でも、今回はケースが違った。

紅丞は、僕の血を、”大量”に飲んだ。

……大量という部分が重要になる。

これはあくまで推測だけど……7割天使、3割吸血鬼の血を飲んだ紅丞は、吸血鬼の血の作用で人間にはない力を得ることになる。そして、その力とは、同時に摂取した天使の血に、吸血鬼の血が作用し、紅丞の中にある人間の血の部分、およそ7割を天使に変えてしまうというもの。

……簡単に言うと、僕の中の吸血鬼の血によつて、紅丞の身体全体の血の割合が、7割天使、3割人間……になつてしまつ。ということ。

以上のことと、僕は紅丞に説明した。

「マジ……かよ……。」

紅丞はがっくりと肩を落とした。

「紅丞……多分、あと数分ほどで、身体に見える変化が現れると思う……それがどんな変化かは、さすがに僕にも解らないけど……。僕の言葉は耳に入つてゐるのか……解らないけど、紅丞はがっくりと肩を落とし、うなだれたままだつた。

「紅丞、今日は学校、休んだ方がいいよ。未来ちゃんには僕から言つておくから……。」

「……わかった。」

紅丞は俯いたまま、自分の部屋に戻つていった。

説明（後書き）

ちょっとくら矛盾が生じても、作者は気にしない人です。

絶望

「畜生……。」

俺は自分の部屋に戻り、ベッドに倒れ込んだ。

……たった一度の過ちで、自分の運命がいつも簡単に変わってしまう
つたなんて……受け入れることが出来ない。

しかも、あと数分ほどで、身体に見える変化が現れてしまつ……俺
は、人間ではなくなつてしまつ。

そうなつたら……俺はどうすりやいいんだ？

人間としての生活を……送ることは出来ないのか？

「……未来……。」

ふと、そう呟いてみた。
助けに来てくれる。来るわけないんだ。

今の俺は 絶望だ。何も残らない……。

「……どうすりやいいんだよ。」

仰向けになり、天井を見上げる。

いつそ、このまま一度寝して、起きたら全部夢でした……ならいいの
にな……。

なんて思つていた、その時

ドクンッ

心臓が大きく脈打つた。

「え……？」

今、何が……と思っていると

「うう！？」

急に身体が熱くなつた。

な、なんだ？これ……身体中の血が燃えるよつて熱い……全身から汗
が吹き出でる……。

背中と頭が痛い……苦しい……。

そして

「……うああああああああ……！」

俺は氣を失つた。

人間天使

「うう……。」

なんだうう……身体がだるい……頭が痛い……。
俺、今まで何してたんだ……？

気がつくと、時計の針は3時を指していた。

「水……。」

断水していることも忘れ、俺は壁づたいに、洗面所に向かって歩いた。

洗面所にたどり着き、すがるように蛇口をひねる。
案の定、水は出ない。

「え？……ああ、工事で断水してんのか……。」

そんなことを言いながら、顔を上げ、目の前に掛けてある鏡を見た。

「……え？」

そこに「写る自分の姿に、驚愕した。

俺の身体は、肌がまるでグレイのような真っ白い色に染まっており、
黒かった瞳の色は、絶望を示す青色に。黒かった髪は……澄んだ空
のよつた水色になっていた。

「な、なんだよ、これっ……。」

俺の心中を察するように、鏡の中の俺の瞳の色が更に青くなつてい
く。

全て、思い出した。

確か俺……グレイの血を、それもかなりの量を飲んじまつたんだっけ
……。

それで、これが……。

「つ……笑えねえよ……。」

俺はその場に崩れるよつて座り込んだ。すると

「紅丞……。」

後ろからグレイの声がした。

「グレイ……俺……。」

「……ちょっと、こっち来て。」

そう言つうと、グレイは俺の部屋に行つてしまつた。

俺も立ち上がり、後に続いた。

部屋に行くと、グレイが深刻な顔をして待つていた。

「……ベッドに座つて。」

俺は言われるがまま、ベッドに腰を下ろす。

すると、グレイが俺に近付き、いきなり俺の腕を掴んだ。

「……なんだよ、いきなり。」

「すぐ終わるから、じつとしてて。」

グレイの目は、真剣そのものだった。……従うしかない、と思つた。グレイは俺の腕を見つめ、目を見つめ、髪を見た後、こいつ言いだした。

「……髪と肌と目が、完全に天使になつてゐる。」

「えつ……？」

「口開けてみて。」

驚いてる俺に構うことなく、グレイは続けた。

「……仕方なく、口を開けてみせる。」

「……吸血鬼の要素は無いみたい……。もう閉じていよいよ。」

「なあ……グレイ、これ、何をしてるんだ？」

俺からの質問に、グレイは少し冷酷な感じで答えた。

「……さつき言つたでしょ？ 天使の血が7割で、人間の血が3割になるつて。今、その3割の部分を探してるんだよ。……ちょっと、

立つてもらえる?」「

俺は立ち上がった。

その瞬間、グレイは俺の身体にしがみつき、胸の辺りに耳をあてた。

「……ちょつ……グレイ? 一体何を

「紅丞、少し黙つてて。」

「……。」

数秒後、グレイは俺から離れた。

「心臓の音は人間の時と変わつてない。……多分、残りの3割は、臓器のことかもしれない。」

「……でも、わかつたところで何の意味があるんだよ?」

「いや、特に意味はないんだ。ただ、紅丞が少しでも元気になれば、と思つて……。」

「……気持ちは嬉しい。でも俺の知りたいことはそんなことじやなくて……その……俺は、元の人間の身体に戻れるのか?」

俺からの質問に、グレイは一呼吸おいて、こう切り出した。

「……僕は他にも、誤つて天使になつてしまつた人間の話を聞いたことがあるけど、人間の身体に戻つたなんて話、聞いたこと無い……。」

え?

「ちょっと待つてくれ……え?」

「じゃあ、俺、一生このままなのか……?」

グレイは悲しそうな顔をして答えた。

「……多分、そうだと思つ。」

「そんなん……。」

嘘……だろ?

一生、このまま……?」

こんな身体じや、外に出ることも出来ないっていつの元……？

「…………。」

何も言葉が出ない。

放心状態 時間が止まつてゐみたいだ。

実際に止まつてくれれば、嬉しいんだがな……。

すると

ピンポーン

家のチャイムが鳴つた のと同時に

ガチャツと、家のドアが開いた。

……誰だ？こんな時に……。こんな姿じや、人に会えないっていつの元……。

そして、信じられない声が聞こえた。

「紅丞せんぱーい。いますかー？……安藤ですー。」

声の主は、安藤未来だった。

「み、未来ちゃん！？」なんで来ちゃつたんだろう？」「グレイは、未来の突然の訪問に焦りを隠せない。……もちろん俺も。「なあ、さつき、学校休むときに、”未来には伝えておく”……みたいな」と言ってなかつたか？あの後、未来になんて言つたんだよ？」

「……紅丞は、夏風邪が酷いみたいだから休む”つて……。」

「あのなあ……今何月だと思ってるんだよ……まだ4月だぞ。明らかに嘘だつて見抜かれるにきまつてんだる。」

「……ごめんなさい。」

謝つてももう遅い。未来は来てしまつた。

「……それよりもさ、紅丞。どこかに隠れないと、未来ちゃんにその姿……見られちゃうよ。」

「ああ……わかってる。」

今ここでバレたら、冗談抜きでヤバい。

早くどこかに……と、その時。

ガチャツ、ドアが開き、未来が部屋に入ってきた。そして

「……先輩？」

未来は、俺の姿を見てしまつた。

「……先輩、どうしたんですか？その姿……。」

「いや、これは、その……。」「

戸惑う俺、するとグレイが……

「待つて、紅丞。……未来ちゃん、僕が説明するから　　」

そして、グレイは、起こったことを全て話した。

「せ、先輩が、人間じゃなくなる……って、そんな……嘘だよね、グレイ？」

「……本當だよ、未来ちゃん。」

「そんなっ……。」

未来は、先ほどの俺同様、呆然とその場に立ち尽くしていた。

「……未来ちゃん、ちょっと、2人だけで話がしたいんだけど、いいかな？」

グレイがいきなりそんなことを言いだした。

その言葉に、今度は俺が食いついた。

「ちょっと待て、なんで俺抜きなんだ？」

「……紅丞は、聞かない方がいいから。」

そう言つうと、足早に未来を連れて出て行つてしまつた。

「……なんだよ、俺に聞かれたくないことつて……。」

そう言いながら、ふと、ベッドに横にならうと、振り返つたときにある異変に気づいた。

「あれ？……服が大きい……。」

さつきまでピッタリだつた服のサイズが、何故か少し大きい。手が袖に入つて完全に隠れてしまつていて。

足の方も、ズボンの裾が床についてしまつていて。

「おかしいな……服のサイズ間違えたか？」

異変はそれだけではなかつた。

……ベッドが高い。

高校入学の時に、高さを合わせて購入したはずのベッドが、異様に高く見えた。

「……どうなつてんだ？」

グレイなら何か知ってるかもしねれない。

俺は部屋を出て、床についてしまっているズボンの裾をまくり、階段を降りた。

リビングでは、グレイと未来が何かを話していた。

……そういえば、俺に聞かれたくないことって、何だろう？
俺は、ドアの影から、2人の会話に耳を傾けることにした。

発見（後書き）

とりあえず登場したので未来の事について紹介を。

安藤未来

年齢：17歳（多分今作から）。12月7日生まれ

身長：159センチ。

暁文のパートナー。正義感が強く、物事をはつきり言わない人が大嫌い。先輩だろうが人外だろうが悪いことをした者には容赦なく説教する。

こんなところですかね。誕生月は時期と辻褄が合いつゝこと、誕生日は適当につけました。

盗み聞き

「……未来ちゃん、以前、僕が精神的ストレスが原因で、身体が縮んでしまったことがあるよね？」

「うん……あの時は、天使が縮むって知つて、結構驚いたけど……。」

「それでね……どうして僕がストレスで縮んでしまったか、わかる？」

「それは……天使だからでしょ？ 天使は、精神的ストレスで身体が縮むつて瀬夏から聞いたことがあるから。」

なるほど、だからグレイはあの時、ほんの少しだが、縮んでしまったわけか。

「……だから天使は必然的に、精神的ストレスに耐えられるような、気の強いタイプが多いんだ。……弱いと、すぐに縮んで”消滅”してしまうからね。」

「でも、それと紅丞先輩と、何の関係が……？」

「未来ちゃん、紅丞の性格がどういうものか、解るよね？」

「うん……確かに、先輩の性格は……あつ。」

未来は何かに気付いたように声を上げた。

「俺の性格と、天使の血と、どう関係してるんだ？」

「確かに、紅丞先輩って……。」

「……本人はコンプレックスに感じてるみたいだから、言いたくなかつたんだけど……紅丞って、結構”打たれ弱い”よね？」

「うん……軽い一言でも、簡単に傷ついてしまう……確かに、そう言う人だつたはず。」

確かに俺は昔から打たれ弱いが、そこまで言つ必要あるか？
…………。

「こことは、未来ちゃん、わかるよね？」

「…………簡単にストレスが溜まりやすい体质……ってこと？」

「わつ。…………要するに、”身体が縮みやすい体质”って事なんだ。」

”身体が縮みやすい体质”。

その言葉を聞いた瞬間、全身の血の気が引いていくを感じた。

…………え？

じゃあ、さつきから、服のサイズとか、ベッドの高さとか……俺が縮んでしまったのが原因……ってこと……？

そして更に、こんなことが聞こえた。

「…………しかも、紅丞の場合、人間の血が邪魔をして、一度縮んだら元の大きさに戻れない可能性がある。」

…………え？

「グレー、それ、どういっ

「

そこから先は、聞くことが出来なかつた。

俺は放心状態のまま、ゆっくりと部屋に戻つていつた。

盗み聞き（後書き）

”的”つけてよかつたのかなあ…と思つ今日この頃。

恐怖

俺は自分の部屋に戻り、倒れるようにベッドに入った。

身体が……縮む？ しかも、元に戻らない？

なんだそれ……最高の嘘じゃないか。

でも、事実なんだ。しかも、最低な事実。

俺はいつか、身体が縮みまくって、”消滅”しちまいんだ。

怖くないわけ無い。むしろ泣きたい気分だ。

まだ……まだ、未来に告白の返事を聞かないまま、終わってしまうのだろうか？

嫌だ。俺は未来が好きだ。返事を聞けないまま消えるなんて嫌だ。

そう思っていた、その時

「つー？」

身体中に電流が流れるような感覚がした。

そして、部屋全体が急に広くなり始めた。

違う。部屋が広くなってるんじゃない、俺が縮んでるんだ。

身体が、縮む！？ 縮みまくったら……消滅！？

嫌だ！ 嫌だ！ 嫌だ！ 嫌だ！ 嫌だ！ 嫌だ！ 嫌だ！ 嫌だ！

怖い！ 怖い！ 怖い！ 怖い！ 怖い！ 怖い！ 怖い！ 怖い！

怖すぎる！ 怖すぎる！ 怖すぎる！ 怖すぎる！ 怖すぎる！

すると

ガチャッ

「先輩、お待たせしまし……先輩つー？」

未来が一人で部屋に入ってきた。

「せ、先輩つー！」

俺の姿を見て、未来はすぐに俺に走り寄り、俺の身体に触れた。すると、身体の収縮が止まつた。

「先輩、何があつたんですか！？」

「わからんねえ……。急に身体が縮みだして……。」

俺の身長はもう、未来の膝下ぐらいにまで縮んでいた。

服もブカブカで、少し脱げかかっている。

「……なあ、未来。俺……元の大きさに戻れないのか？」

「え？……まさか、さつきの話、盗み聞きしてたんですか！？」

俺は小さく頷いた。

「なんてことを……。盗み聞きなんてしちゃダメじゃないですか！」

「……ごめん。……なあ、俺、このまま縮みまくつて……消滅、しちまつのか？」

「そ、それは、その……」

「俺、消えちまつのか？死んじまつのか？……どうなんだよつ、未来……」

その瞬間、未来は急に、小さくなつた俺の身体をぎゅつ、と抱きしめた。

「つ……え？」

今、俺、抱きしめられてる？……未来に？

……心臓が俺の胸の奥で暴れてる。

未来……凄く暖かい……このまま眠つてしまいそうだ……。

すると、”トクツ、トクツ” という規則正しく動く、心地の良い音が耳に飛び込んできた。

これは、未来の心臓の音だ。しかも、かなり速い。

「……未来？」

「……私、もうこれ以上、先輩を縮ませたりしません。絶対に元に戻して見せます。」

断言された。でも

「でも、もつこんなに縮んじまつてんのに……どうするつもつだよ……？」

すると、未来は俺を離し、俺を見つめ始めた。

……至近距離で目があつてゐる。心臓が更に鼓動を速める……。

「み、未来、何するつもりだよ……？」

俺の質問に答えることなく、未来は意を決したような表情をすると、俺に顔を近づけてきた。

俺は反射的に目を開じる。

そして

唇に、柔らかい何かが触れた。

そつと目を開けてみると、未来の顔がすぐ目の前にあつた。その距離、0？。

突然のことには理解が追いつかない。

今、俺、未来と……”キス”してんのか？何で？

すると、その瞬間、またしても、身体に電流が流れるような感覚が

し、俺の身体は、徐々に成長していった。

身体が元の大きさに戻った。

でも、未来はまだ俺を離してくれない。

……そろそろ苦しくなってきた。

「んつ……。」

未来……離してくれ……。

口が動かない代わりに、心の奥でそう念じる。

すると、念が通じたのか、未来は俺をそつと離した。

「つ……はあつ……。」

俺はベッドの上に倒れ込む。

心臓の鼓動が僅かに身体を揺らしている。

「先輩、元の大きさに戻ってるじゃないですか。」

未来は余裕な表情を浮かべている。

「はあつ……そうみたい……だな……。」

「……大丈夫ですか？」

「……んなわけあるか。……頭は混乱してるわ、全身から汗が吹き出るわ、心拍数は上がりまくってるわ……もうわけわからんねえよ……。今、何が起こったんだ？」

「えつと……先輩は、身体が縮んでも、元の大きさに戻らないわけじやなくて……」キス”をすれば元の大きさに戻るみたいなんです。

「き、キス！？」

「はい、……それも、相手は私じゃないとダメなようで……。」

未来は軽く目を伏せながら言った。

「ま、マジか？」

「……実際に戻ったんですから、疑いようが無いじゃないですか。」「いや、そうだけど……え？ 何でキスなんだ？」

俺からの質問に、未来は少し真面目な顔をして答えた。

「……盗み聞きしてたのなら知ってると思っていましたが、天使は、精神的ストレスが原因で、身体が縮んでしまうんです。……ここまでいいですね？」

「ああ。」

「で、それを戻す方法は……”恋”なんです。」

「恋？」

「はい。……正確には”恋に満足した状態”なのですが……わかります？」

「……ごめん、解らない。」

「じゃあ説明しますね。」

そう言いつと、未来はいきなり俺の手を掴んだ。

「……何赤くなってるんですか？」

未来が呆れながらそんなことを言つ。

「し、仕方ないだろ……早く説明してくれ。」

俺は目をそらしながら答える。

「……今、こうやって私が先輩に触れてる間、先輩はずつとドキドキし続けるわけですよね？」

「まあ、そう……なるけど。」

確かに、こうやって未来に触れられないと、心拍数が更に上がつていいくのが解る。

「……これが、”恋に満足した状態”です。」

「え？ ……”ごめん、解らない……。」

「ほら、好きな人と一緒にいるだけでドキドキするとか、よくある話じゃないですか？」

「まあ、確かに……。」

「ああ言つ感じが、世間一般に言つ”恋”なのは解りますよね？」「す、少しあ……。」

「で、今こいつやって、触れ合っている状態が”恋に満足した状態”つて事です。」

「……でも、わつき、未来が俺の身体に触れても、元には戻らなかつたぞ？」

「それは、先輩の中にある、3割の人間の血が邪魔をしているのが原因です。あれくらいでは元の大きさには戻りません。」

「だから、キスなのか……。」

「はい。先輩はある意味、”縮みやすく、元の大きさに戻りづらい”。そう言う体質なんです。」

「……ことは、ちょっと待てよ?……キスでしか元に戻れないってことは……。」

「……しそつちゅうキスする羽目になりますね、私達。」

「ま、マジかよ……。」

そんなことになつたら、命がいくつあっても足りねえよ……恥ずかしさと緊張で精神崩壊するかもしれねえよ。

「でも、いいじゃないですか。先輩つて、私のこと好きなんですよね?」

……え?

「今、なんて?」

「え?……ですから、先輩つて、私のこと好きなんですよね?……自分で告白したのに、忘れたんですか?」

「……覚えててくれたのか?」

「え?」

「告白したの、覚えててくれたのか?」

「……当たり前じゃないですか。」

「……そつか……。」

ふと、俺の目から、大粒の涙がこぼれた。

「せ、先輩……?」

「いやあ、俺てつきり、未来が、俺が告白したこと忘れてるんじゃねえかなとか思つてて……。」
袖で涙を拭きつつ、そう言つた。

「忘れるわけ、ないじゃないですか。」「だよなつ……すっげえ嬉しい……。」

涙が止まらない。

「……泣かないでくださいよ。」

未来が心配そうに俺の顔を覗く。
そして、こう言いだした。

「……実は私、今日は先輩に伝えたいことがあって来たんです。」「え？……そうなのか？」

風邪が嘘だつて見抜いたから、てつきり怒りに来たのかと思つたん
だけど……。

「はい。」

未来は、一度恥ずかしそうに顔を伏せ、再び俺の方を向き直り

「私、紅丞先輩の事が大好きです。」

その顔は、はにかむような笑顔だつた。

希望？（後書き）

未来の説明が前々作の瀬夏の説明と若干矛盾が生じるかと思します
が、軽く受け流してください。○・△

紅丞先輩に告白した。

直後、先輩は思考が停止したのか、5秒くらい固まっていた。

「……先輩、意外と単純なんだな……。」

なんて思いながら、先輩の手を離すと、先輩はゆっくりと身体を起こし、俯いてしまった。そして……

「……うつ……。」

そのまま、また泣き出してしまった。

「せ、先輩、泣かないでくださいよ。」

「だ、だつて……。」

……これで先ほどのような幼児体型ならまだ良いものの、今は高校生の体型なのでかなり滑稽に見える。

「……未来。」

「何ですか？」

「俺も、未来のこと……大好きだつ……。」

ほとんど涙声だったが、言いたいことは伝わった。

「……ありがとうございます。」

私は、先ほどと同様に、先輩をぎゅっと抱きしめた。

「未来いつ……。」

先輩も、私を抱きしめてくれた。

貰い泣き　　とまではいかないが、先輩のすすり泣く声に、少し目
が潤んでしまった。

「先輩、私と同棲しましょ。」

泣きやんだ直後、未来からそんなことを言われた。

「え? 何で?」

「何でつて……私の家から先輩の家まで最低でも一時間はかかるわけですから……その間に先輩が縮んだら大変でしょ。」

「ああ、なるほど……。」

「じゃあ、私、今から帰つて荷物まとめてきますね。」

「え? 僕の家で同棲するの?」

「はい。」

「マジか……。」

「……だらしない生活してたら……わかつてますね?」

「目が怖い目が怖い。」

「は、はい……。」

「では、行つてきます。」

そう言つと、未来は足早に立ち去つとし、ドアノブに手をかけた辺りで止まり、こちらを振り返つた。

「あの、先輩。」

「ん?」

「……私がいなきからつて、縮んだりしませんよね?」

「……どうだかな。」

少し不安を煽るようなことを言つてみた。

すると、未来の表情が急に真剣になり、早歩きで俺の元に歩いてきた。

そして、素早く顎を持ち上げ、キスをした。

「んつ……ー?」

あまりの速さに怯んでしまつた。

10秒後。よつやく未来は俺を離してくれた。

「はあっ……。」

息が上がっている。

「それじゃ、先輩。行ってきます。」

疲れ果てた俺を後目に、未来はそつそつと、早歩きで部屋を出て行つてしまつた。

……怒らせちまつたかな……。

決意（後書き）

思い切つたことするキャラは嫌いじゃないです。

未来が去った後、俺はすぐにグレイのところへ行つた。

「紅丞、どうしたの？そんな真剣な顔して……未来ちゃんと何があった？」

グレイが心配そうな顔で聞いてきた。

「いや、確かに色々あつたけど……聞かない方が良いと思う。」「教育に悪い。

「……わかつた。」「

「で、頼みがあるんだけど。」「

「何？」

「俺に、憑依の方法を教えてくれないか？」「

そういうつた途端、グレイの瞳が青く染まつた。

「……え？」

「俺は、ずっと未来と一緒にいなといけない。……だから頼む、教えてくれ、何でもするから。」「

「……わかつたよ。」「

グレイの表情は、不安一色だ。

「……グレイ、憑依って、そんなに難しいのか？」「

「いや、簡単だよ。でも、紅丞がアレに耐えられるかどうか……。」「

「な、なんだよ、アレって。」「

「アレって言つのは……さすがに僕の口からは言えない。自分で確認してほしい。」「

「わかった。じゃあ、憑依の方法、教えてくれるんだな？」「うん。」「

俺は、グレイから憑依の方法を教わつた。

それは物凄く簡単だつたが、グレイの説明がややこしくて、覚えるのにかなり時間がかかつてしまつた。

未来が俺の家を出てから、約2時間半が経つた。
そろそろ帰つて来てもいいのになー。なんて思つていいと
ガチャリ、と家のドアが開いた。

「紅丞せんぱーい。ただいま戻りましたー。」
「未来ちゃん、早かつたねー。」

俺よりも先に、グレイが玄関に向かう。

「……未来ちゃん、凄い量の荷物だね……。」
グレイはかなり唖然とした様子だつた。

俺も玄関に向かい、荷物の量を確認した。

「……凄いな。」

大きめのキャリーバックが2つ。しかも両方ともパンパンになつて
いる。

「未来、これ、何入つてんだ?」

「何つて……女の子にそれ聞きます?」

未来とグレイから同時に非難の視線が来た。

……別にそういうつもりじゃないんだけどな……おかしいな……あはは
……。

「つ……やめろやめる、2人して睨むんじゃねえよ……誤解だつて。
そんなに睨むと身体縮んじまうつて。」

「まあ、そうだけど……ねえ?」

未来とグレイが顔を見合わせる。

……ああー、辛い。

「……とにかく、その荷物、部屋に運ぶから、どっちか貸せ。」

「あ、良いです。一人で運ぶんで。」

……そんなに俺のこと信用できない?

「……ちなみにそれ、重量はどんくらいなんだ?」

「確かに、両方とも15キロだったと思ひます。」

総重量30キロ……力持ちすぎんだろ、未来。

未来は、5分くらい時間をかけて、俺の部屋に荷物を運んだ。
そして、一息つくようにベッドに座ると、俺の方を見て、こう言つて
だした。

「先輩……また縮んだんですか？」

「ああ、実はな……。」

先ほどから気づいてはいたのだが、身長が未来の胸の辺りまで縮んでいた。

「……先輩、何でそう簡単に縮んじゃうんですか。打たれ弱すぎでしょ。」

「打たれ弱い俺をいじめるお前らもどうかと思つがな。」

「え？ 私たちがいつ先輩をいじめました？」

「……。」

さつきの玄関での光景を今一瞬で再現してやつてえよ。

「……そう言えば、未来。」

「何ですか？」

「暁文はどうするんだ？」

「暁文は……」お腹が空いたら紅丞先輩の家に来るよつて、と言つておいてあります。」

「なるほど、それならいいか……。」

「……先輩、ちょっとこつちに来てください。」

未来がそう言いながら手招きしてくる。

「なんだよ、いきなり……。」

俺は言われるがまま、未来の元へ歩いていった。

すると、未来はいきなり立ち上がり、俺を抱きしめた。

「えつ……ー? ちよつ……いきなりなんだよー?」

焦る俺。でも未来は……

「はあー……先輩、暖かいですねー……。」

なんて言いながら俺を更に強く抱きしめた。

胸のあたりに俺の顔が来てるから、かなり気持ちのいい感触がつて、そうじやなくて。

「未来つ……苦しい……。」

「そ、 そ う な の カ ?」

「はい。……身体が常に暖かいんです。だから、この風にぎゅーっとすると、とても気持ちいいんですよ。……外から帰ってきたばかりで、寒かったんですねー……。」

「 そ、うか…… なあ、そろそろ離してくれても

「俺が鳥を捕ると、それを抑え止めておけ。」

つあー…………苦しい…………心拍数が上がってる…………身体が熱い…………。

わが子たるわが子たるからこそ少し力を締めてくれないか

「嫌です。……どうせ逃げるでしょう？」

何故解つた!?

「未来、お前、俺を暖房器具か何かだと思つてねえか……！？」

「少なぐとせ今」アハハですね……

「…………」それとなく机に籠りて、」

お、
暑れなつて、かさ
ベタベタ暑れる俺を呼んで、

座つた。

危ないですか」と、心配してくる太郎。

俺は仕方なく、未来に身体を預けることにした。

胸のあたりに耳を置き、そつと口を開じる。

すると、さつきよりも速くて力強い、未来の心臓の音が聞こえた。

「いや、それは今の俺も同じなようだつた。」

「……未来。」

「なんですか？」

「……未来の心臓の音が聞こえる。」

「……そうですか。」

「なんか、速くて、力強くて、気持ちいい……。グレイや、暁文の気持ちがわかつた気がする。」

「……ありがとうございます。」

未来は少し反応に困つていてよつだつた。

「……俺、未来の事が大好きだ……。」

ふと、そう言つてみた。

「……ありがとうございます。」

未来は更に腕に力を込める。

……心地良い、未来の心臓の音を聞きながら、いつの間にか俺は眠つていた。

至福の時（後書き）

現実世界の作者は明日から冬休みです。

「先輩……紅丞先輩、起きてくださいよ。」

ダメだ、何回搖すつても起きない。完全に熟睡してゐる……。抱きしめた後、気が済んだので、離したら、まさか眠つてしまつてるとは……予想外だつた。

先輩はまだ、私よりも少し小さい……小学生の体型のままである。……やつぱり、寝たままキスして、元に戻すべきだろうか?いや、さすがに怒られるか?……でも、全然起きないし……。いいや、やつてしまえ。

私は意を決し、睡眠中の先輩にキスをした。

すると

見る見るついに身体が成長しているのが解つた。

身体が元の大きさに戻り、さすがに起きるかな?

「んつ……未来?」

先輩が目を覚まし、ゆつくりと身を起こした。

「寝ちまつた……。」

目を擦つてゐる。

「……あれ?なんで元の大きさに戻つてんだ?」

「あ、私が戻しておきました。……起きないんで。」

「え、あ、わかつた……ありがとう。」

先輩が顔を伏せる。……なんか、可愛いなー。

「あの……先輩。」

「何だ?」

「これからのことなんですか?……どうします?学校とかあります

し。」

「…………。」

先輩は、深刻な顔をして黙つてしまつた。そして

「……未来。」

「なんでしょう?」

「俺……学校辞める。」

「えつ……!?」

「だつて、この姿じやあ学校なんてとても無理だ……。今日だつて休んじまつたし。」

「ま、まだ人間に戻れないって決まつたわけじや」

「

「俺は、もう人間には戻れないんだよ……!」

辺りが、一気に静かになつた。

「……先輩……。」

「グレイが言つていた……今まで、天使になつた人間の話を何人も聞いてきたけど、元に戻つた奴の話は聞いたこと無いつて……。」

……なんだそれ。

「それ、ただの前例ですよね?」

「……え?」

「それつて、グレイが”聞いた話”ですよね?……グレイが”実際に見た”わけじゃないですよね?」

「それは、そうかもしないけど……。」

「しかも、その話、先輩の事を予言してるわけじゃないですよね?」

「……そうだけど、それがどうしたんだよ?」

私は両手で先輩の両肩を掴み、しつかりと目を見て、断言した。

「グレイの話は、ただの前例に過ぎません。人間に戻れるか、戻れないか、それを決めるのは紅丞先輩自身です。だから、学校辞める

なんて言わないでください。」「

私がそういった瞬間、先輩の瞳が桜のよつたなピンク色に染まつていった。水色の髪に、ピンクの瞳……凄く綺麗だ。

「ありがとう……未来……。」

「いえ……私も、変なこと言つて、すみませんでした。」

私は先輩の肩から、そつと手を離そうとした。その時、先輩がいきなり私の右手を掴み、引き寄せ、抱きしめてきた。

「え？あの……先輩？」

先輩の身体は、心なしか、震えてるよつに思えた。

「俺さ、未来が、俺のこと好きだつて言つてくれて、本当に嬉しかつた……。でも、そこまで心配してくれてるなんて思つて無くつて……。」

耳元から聞こえた先輩の声は、やつぱり涙声になつていて。

私は、先輩を宥めるよつに、軽く背中をさすつた。

「……当たり前じやないですか。私は、紅丞先輩を愛してるんですから。」

そう言つと、先輩は更に強く私を抱きしめた。

……先輩の暖かさが全身に伝わつてくる。

「先輩、やつぱり暖かいですね……。」

「……そうか？……あまりわからないけど……。」

「自分からは解らないのかもせんね。」

「……なあ、未来。」

「なんですか？」

「未来はさつき、”元に戻るか戻らないかを決めるのは俺自身”……つて言つたよな。」

「はい。」

「それつて、要するに、俺自身で元に戻る方法を探せ、つて意味か？」

「いや、そういう意味ではないです。……ただ単に先輩を勇気付け

たかつただけなんで、気にしないでください。でも……。」「でも？」

「……元に戻る方法、心当たりがあります。」「でも？」

「本當か！？」

先輩が更に腕に力を込める。

「せ、先輩……苦しつ……。」「

氣管が、圧迫される……。

天使になつた先輩の身体は、腕力や握力が人間の時の約3倍になつてゐる、とグレイから聞いた。ので、かなり苦しい。

「え？……あつ、」「めん……。」「

先輩は慌てて私を離した。

「げほつ……だ、大丈夫です。」「

「……それにしても、30キロのキャリーバッグを持てるほどの力持ちなのに、人の力には弱いんだな。」「

「……。」「

いつかこの人にはちゃんと力の事を伝えないとな……。

「それで、その方法なんですけど……先輩、カラスつて解ります？」

「カラスつて……鳥の？」

「いいえ、あの、悪魔の方なんですけど……解ります？」

「ああ……確かに、グレイの羽に寄生してゐるつて聞いたことがあるな……俺はまだ会つたことはないけど。」「

「実は、カラスつて、悪魔の王らしいんですよ。」「

「悪魔の、王！？」

「俗に言つ、魔王。ですね。」「

「そうなのか……。」「

「はい。……それで、もしかすると、カラスなら先輩を人間に戻してくれるかもせんよ。」「

「……どういう意味だよ？」

「カラスは魔王です。その力は、通常の悪魔よりも多いんです。私も、何度も助けてもらつたことがありますから、もしかすれば……。」「

「なるほどな……。でも、カラスでも無理だったら、どうすればいいんだよ？」

「……そこは考えてませんでした。でも、カラスを信じましょう、今はそれしかありませんよ。」

「そうか……だけどな、未来。一つだけ、問題がある。」

「なんですか？問題つて……。」

「俺はまだ、カラスに会ったことがない。」

「それが、どうかしたんですか？」

「だつて、俺はグレイと、かれこれもう半年は一緒にいる。……なのに、カラスは一向に俺に姿を見せない、未来の目の前には現れたのに……。これつて変じやないか？」

「先輩の事を避けてる……つてことですか？」

「俺はそう考てるんだが、どうだろう？」

「どうだろうつて……カラスに聞いてみなきや、わからないじやないですか。」

「いや、だから……な？」

「……私に聞け、と？」

「頼む。」

先輩の表情はかなり真剣だ。

「……わかりました。出来れば、聞いてきます。」

「ありがとう。」

先輩は少し嬉しそうな顔をした。

窓の外は、そろそろ日が沈みかけていた。

「もうこんな時間……そろそろ、暁文が来る頃だと思います。あいつ、今日は昼飯も食べてないんですね……。」

「てことは、俺もそろそろグレイに……あ、でも、身体の7割は天使の血だから、無理なわけか……てことは……。」

俺は、期待の眼差しで未来を見る。

「……解つてますよ。グレイの分まで 私が 血をあげればいいんですね？」

「……今、さりげなく、”私が”の部分を強調された気がする。

「……なんか、ごめんな。」

「いいですよ、仕方ないですから。じゃあ、暁文が来る前に、夕食済ませたいんで、台所借りていいですか？」

「別にいいけど……冷蔵庫の中はほとんど（空）（から）だし、家の近くの水道工事で断水中だから、水は出ないぞ？」

「……そんな状態でどうやって生活してたんですか。」

未来が軽く俺を睨む。

「いや、普通に、コンビニ弁当とか、ジャンクフードとかで……。」

「……不健康すぎますって！ちゃんと自炊してくださいよ……それでも高校生ですか！？……そんな不健康な生活送ってるから、グレイの成長が遅くなるんですよ！？グレイは先輩の血を頼りに生きてるんですから、もう少しあちゃんとしてくださいよ……！」

「……怒られたー（・・・・・）

「……『めん。』

「はあ……でも、水が出ないんじゃあ仕方ないです……ちょっと近くのスーパー行ってなんか買つてしまふか。」

「……もしかして、俺の分も作ってくれんの？」

「当たり前です。先輩がそんな不健康な生活送ってるなんて知りま

せんでした。……これからは私が毎日3食作りますんで。」

え？ てことは……俺、毎日、未来の手料理が喰えるつてこと？ 実は、以前も喰つたことあるけど、あれは正直言つと、そこの辺の飯屋よりも美味しいと思つ。どこにも手を抜いてない、絶品だ。

「……それは、嬉しいな。」

素直に感想を述べた。

「だからつて、ダラダラしてばかりいたら承知しませんからね。少しは料理の一つや二つ、覚えてもらいますから。」

「え……マジで？」

「あと、私が料理してる間、ほかの家事もやつてもらいますから。……できますよね？」

「いや、掃除も洗濯もできない。」

「……今までどうやって生きて来たんですか？」

質問がだんだん乱雑になつてゐるような……。

「いや、たまに後輩を家に招いて、家事をしてもらつたりしてたんだよね……。」

「……最っ低……。」

ズキッ

”最低”……その言葉は、俺の心中にクリティカルヒットした。

なんか、身体が徐々に縮んでいくような

「あつ、ちょっと、それくらいで縮まないでくださいよ……」

咄嗟に未来は俺の肩を掴んだ。……身体の収縮が止まつた。

「はあ……。先輩、油断も隙もないですね……。」

「いや、最低は誰だつて傷つくつて……最低つて……。」

「反芻しなくていいですか？……最低は言いました。ごめんなさい。」

未来は深く頭を下げた。

「……礼儀正しいのは相変わらずだな……これじゃあなんだか俺が未

来を苛めてるみたいだから、それじゃあ逆だから、頭上げてくれ。」「未来は頭を上げた。

「先輩、”逆だから”って……その言い方だと、私が先輩を苛めてるようつに聞こえますけど?」「いや、だつてそつだろ、最低つて……。」

「……あれはただ、”私の紅丞先輩”が他の誰かに既に色々されてるつて考えちゃつて、それでつい……。」「ぐはつ……”私の紅丞先輩”、だとよ……めちゃくちゃ嬉しこと言つてくれるじやねえか……。」

「未来つ、その言葉、すつげえ嬉しいよ、ありがとう。」

「なんか、やけに田が輝いてますけど、私何か変な事言いました?」「しかも気付いてねえの……可愛いなー」いつ……。」

「先輩、ずっとニヤニヤしてますけど、何かいいことでもあつたんですか?」「いや、気付いてないならいいよ、あはは……。」

「?……まあいいですけど……あ、そろそろ買ひ物行かなきや……。」「立ち上がろうとする未来の手をとつさに掴む。

「あつ、どうしたんですか?」

「どうしたですかじやねえよ。身体縮んだんだから、戻してくれ。」「…すみません、忘れてました。」「…忘れんな。

そう思つてると、未来は俺の顎を持ち上げ、唇にキスをした。身体に電流が流れる感覚がして、身体がどんどん成長していった。

しばらくして、未来は俺を離した。

「……なあ、未来。」「なんですか?」

「身体が元の大きさに戻つてもまだキスし続けてるのは、何故だ?」「何故つて……完全に元に戻つたかなんて私からは分かりませんか?…つい。」「

「あ、そうなのか……。」

「はい。では、私、買い物行つてきますね。」

「あつ、未来。」

「どうしました?」

「できれば、連れて行つてほしいんだけど……。」

「何ですか?」

「寂しいから。」

「……先輩、本当に高3ですか?」

「大人でも寂しがることはある。」

「我慢してください。それでは

「……放つておいたら、俺、縮んじまうかもしれないぞ?」

「自分の身体のハンデをそういう話術に組み込まないで下さいよ、仕方ないですねえ」でも、その姿じやあ外を歩くことは……。

「いや、大丈夫。実はさつき、グレイから憑依の方法を教えてもらつたんだ。」

教えてもらつといて、披露しないのはおかしいからな……早めに実践に移りたいと思つていたところだ。

「まさか……私に憑依するつもりですか?」

「他に何があるんだよ?」

「まあ、そうですけど……大丈夫ですか?」

「まかせろ、バツチリだ。」

……多分。

「……なんか、不安ですね……でも、先輩を信じることにします。」

「ありがとな。」

俺は未来の肩に頭を乗せ、憑依の言葉を呴いた。

「これが、人生初の憑依だ。」

言葉を呴いた途端に、俺の身体が半透明になり、未来の身体に吸い込まれていった。

未来の身体に入り込んだ瞬間に、俺は落下した。

最低 WWW (後書き)

作者、一瞬調子乗りました。

何が起きたのかよくわからなかつた。

グレイからは、”憑依の方法と解除の方法”しか教えてもらつてないので、”憑依した後、どうなるのか”までは教えてもらつていなかつた。

……てつくり、身体に入り込めば、すぐに意識に到達すると想って
いたのだが、それは単なる思い違いだった。

未来の身体に入り込み、そこで見たのは
闇。

単純に、周りが真っ暗な空間だった。
そして、そこには、足場が無かった。

……例えを使うなら、部屋があるだろう、と思い込んで扉を開けたら、真っ暗で床のない空間だった。と言つたところだろう。

そんな中を、俺は落~~下~~した。

麻モ、何も見えない、全て真っ暗

「どうなってんだー?」と思ひてこねると

バシャン！！

水のような暗くてよくわからないが、液体のようなものに飛び

込んだ。

多分、これが、グレイの言つていた”アレ”なのだろう。

……実は俺、思つた以上にカナヅチなんだよね……何が思つた以上になのか解らないけど。

水中で必死にもがいていた。あることに気がついた。

苦しく、無い？

息が苦しくならない。試しに抵抗をやめ、沈みながら息を吸つても、肺にはちゃんと酸素が入った。……どういう事だろ？？そう思つていると、今度は

バシャン！！

水から抜けだし、俺はその場に叩きつけられた。
……水の底が無いって、どういう事だよ……。

「痛え……。」

俺は腰をさすりながら起きあがる。
すると

（先輩？……大丈夫ですか？）
どこからともなく、未来の声が響いた。

「だ、大丈夫、……多分、憑依成功だ……。」

てことは、今俺がいる、この真っ暗な空間……これが、未来の意識の中、つてことか……田の前には、未来の視界の光景が映し出されている。

（よかつた……叫び声が身体の内側から響いてきたので、何かあつたのかと……。）

「え？あ、『ごめん……。』

（大丈夫です。……それじゃあ、買い物行きますか。）

そう言つと、未来は立ち上がった。未来の視界が大きく揺れた。

（あ、そうだ、先輩。）

「何だ？」

(……買い物中に出てきたりしないでくださいよ?)

「……んなことしねえよ。」

(それなら良いんですけど……。)

未来は一度脱いだコートを着直し、財布を持って家を出た。

(……寒いですねー。)

「もうすぐ暖かくなるわ。」

(先輩、帰つたらまた、先輩に抱きついても良いですか?)

「え? あ、ああ。別に良いけど……。」

(ありがとうございます。)

未来は嬉しそうに笑つた。

……なんだか、こっちにまで嬉しさが伝わってくる。未来の感情が、俺の中に流れ込んでくる。

……ところで、

「なあ、未来。」

(何ですか?)

「これって……デートみたいだよな?」

それを聞いた瞬間、未来の足が止まつた。

そして、周りから、”ドクンシ、ドクンシ”と、心臓の音が聞こえた。

憑依している間は、意識の中から、その人の身体の音が聞こえることがある……ってグレイが言つてた。

「未来? どうした?」

走つてもないのに、未来の心拍数は上昇していた。

(……いえ、デートつて聞いて、なんか恥ずかしくなつて……そつかもしれませんね。)

「なんだ……いきなり心拍数が上がり出すから、何かと思つた。」

(え? ……私の心臓の音、聞こえるんですか?)

「うん……ハツキリと。」

(あ、そうなんですか……。)

「なんだよ、知らなかつたのか?」

（「え、知つてましたけど、聞いえるのは瀬夏と暁文とグレイだけかと思つてて……。）

「多分、憑依出来るものはみんな聞こえるんじゃないか?」

(そ、そなんですか……。)

なんだよ。恥ずかしいのか？」

(そりゃあ、それなりに……。)

「なんだ、結構可愛いな。」

(からかわないでください！ 行きますよー！)

そう語り、未来は足早に歩いていった。

「なんだよー。心拍数はさつきから上がりまく

やねえなー。……素直なのは心臓だけか……。

卷之三

その後 俺が女は 云々と 一緒に買ひ物を済ませた

憑依（後書き）

ここら辺表現が……文才が来い！！！ orz

サブタイはちよつと盛りすぎたかもしません。

家に帰ると、玄関に見慣れた靴があるのが見えた。

……ビヒヒヒ、暁文が来ているようだ。

速いなあ、もう来ちゃったのか……。

（暁文か？）

はい。……多分、会うとすぐに吸血されると想つので、むし身体から出でてください。

（ああ、わかつた。）

そう言つと、先輩は私の身体から抜け出した。

「……憑依つて、するときは大変なのに、出るときは意外とアッサリしてるんですね……。」

「……みたいだな。」

「じゃあ、私、暁文に血をあげてきますんで、先に部屋に戻つてください。」

本当は夕飯の後にしたかったのだけど……仕方ない。

「わかつた。」

先輩は足早に階段を昇つていった。

私は買い物袋の中身を冷蔵庫にしまうため、キッチンへ向かつた。

紅丞先輩の家は、ある意味、大豪邸。

立派な門構えも、高そうな高級車が有るわけでもないが、家だけは普通の民家よりも少し広いのだ。

紅丞先輩の父親は、結構、名が知れた会社の設立者なので、どちらかといつと金はあるらしい。

キッチンにある冷蔵庫に食材をしまい、リビングに行く。

……リビングでは、暁文とグレイがいた。

「未来、来るのが遅いぞ、腹減った。」

「いや、こんなに早く来るのは思つてなくて……。」

「未来ちゃん、紅丞が今、あんな状態だから、僕の分も血を分けてほしいんだけど……。」

「わかつてゐるわかつてゐる。」

「なんなんだこの2人……。」

「じゃあ、まずは暁文から。」

私がそう言つと、暁文は立ち上がり、私に近付き、素早く肩を掴んだ。

「そんな、抑えるようにしなくとも、逃げないから。」

「いや、じつしないと歯が刺さらなくて……。」

そして、首筋に歯を刺した。

「いつ……。」

心なしか、いつもより深く刺されたような……『氣のせいだらうか?』

吸血鬼と言つのは、歯を刺したまま吸うのではなく、歯を刺し、血管に穴をあけ、歯を抜いてから吸い付く。……ので、刺すときと抜くとき、2回痛みが来る。

暁文は素早く歯を指し込み、素早く引き抜いた。

「暁文、もう少し丁寧にやつてよ……焦るのは解るけど、ちょっと痛い……。」

実際は、ちょっとではなく、かなり痛い。

「んつ……『めん。』

暁文は一言やう言つと、首筋に出来た穴に吸い付いた。

耳元から「ゴクゴクと血を飲み込む音が聞こえる。

物凄く美味しそうに飲んでくれるのは嬉しいんだけど、一口の血を吸う速度が速すぎて心臓が不整脈を引き起こしている。

「つ……暁文、もう少しゅつくり吸つて……。」

聞こえてないのか、わざとなのか、暁文は更に吸う速度を速めた。すると

髪が物凄い速さで短くなり、身体が男になつた。

「あ、暁文、もう、良いだろ……？」

「……そうだな。」

暁文は俺を離し、ソファに座った。

「なあ、暁文、……吸う速度、もう少し遅くしてもいいんじゃねえのか……？」

「昼飯抜きだつたんだから、仕方ねえだろ。」

「まあ、そうだけど……じゃあ、次はグレイだな。」

それを聞き、グレイは俺に近付く。

「あれ？ グレイ、吸血道具は？」

「必要ないよ。」

「でも、以前、血をあげた時は吸血道具必要じゃなかつたっけ？」
「あれは権利剥奪の前だつたからね。歯で吸血すると契約になつちやうし、多重契約は死刑に相当するからできなかつたんだ。
でも、もう僕もアカツキも、もう吸血鬼界の住人じゃないから、多重契約しようが関係なくなつちゃつたんだよ。」

「へえ……、そうだったのか。」

それを聞き、俺は、グレイが血を吸いやすいように、しゃがんでグレイに目線をあわせる。

「未来ちゃん、僕も、もしかしたらアカツキと同じくらい喰い付くかもしぬないけど、いいかな？」

「え？……まあ、好きなようにしていいよ。」

暁文が”自分の時は対応が違うぞ”とでも言いたそうに、俺を睨んでいる。……俺は、”お前の場合は加減してくれねえだろ”と思いつながら暁文を睨み返した。

グレイはその事に一切気付かずに、まだ穴が開いている俺の首筋に吸い付いた。

やっぱり、暁文とは違う。そこまで一気に吸わないし、飲み方も悪くない。……全部、グレイの身体が小さいのが理由なわけだが。ただ、強いて問題をあげるなら……。

「んつ……。」

……なんで血を飲み込むときにいちいち声を出すのか、といつ事だ。

「グレイ、何も、声出して飲まなくても良いんじゃないのか？」

グレイの頭を軽く撫でながら話しかける。

「声出さないと上手く飲み込めないんだよ。……喉が細いから。」

「ああ……そう言つことか。」

グレイは、本来なら21歳の身体なのだが、小さい頃に受けた迫害のせいで、10歳児程度の身体のまま、成長が止まってしまったのだ。

だから、身体そのものは小さい……のだが、臓器の大きさがバラバラで、”胃は大きいのに食道が細い”というアンバランスな状態のため、声を出して飲む方がやりやすいのだそうだ。

「僕だつて、恥ずかしいと思つてるんだからね？あまり掘り下げられると困るよ。」

「それは……」めんなり。」

俺の謝罪の言葉を聞き、グレイはまた血を吸い始めた。すると

髪が急速に長くなり、性別が切り替わった。

グレイはそれを確認し、私を離した。

私はフラフラしながらもなんとか立ち上が

れなかつた。

私はその場に倒れてしまった。

「未来ちゃん！大丈夫！？未来ちゃん！－！」

グレイが私に駆け寄る。

「……眠い……。」

私はそう呟いた。

「え……？」

「性別変わると眠くなるの……。」

「え、そうだつたの？」

「うん……。」

ヤバい、そろそろ瞼^{まぶた}が閉じかけてきた……。

すると、暁文が立ち上がり、私をお姫様抱っこした。

「あつ……暁文……」

「まつたく……2人同時に血を『』えるからそつなるんだろう?」

「一番吸つてたのはあんたでしょ……?」

「ん?……そうだつたか?」

「確信犯か……」

「俺はちゃんと未来の性別が変わつた直後に離しただろ、同じだ。」
「そう言いながら、暁文は私を抱えたまま、グレイを置いて、リビングを出て、階段を昇り始めた。

「暁文、出来れば、今度からもつ少し丁寧に吸つて欲しい……よ……。」

「暁文に抱えられたまま、私は眠つてしまつた。」

裏来（後書き）

暁文が登場したので、ちょっとくら説明を。

朝比奈暁文

年齢：25歳。7月25日生まれ。

身長：175センチ。

未来のパートナーであり、吸血鬼。食にこだわりがあり、未来の血しか飲まない。他の吸血鬼からはアカツキと呼ばれている。

暁文の名前が2つある理由は今度書きます。

夜。

今、俺の隣で未来が眠っている。

先ほど、暁文が「血を吸い終えたから。」と、眠った状態の未来を連れてきたのだ。

……なんか、”余つたから”って理由で残飯を『えられた犬のような気分だ…。

未来は、2度も血を吸われて、顔色は青白くなっている。
そつと髪をなでてみた。

「……ん…。」

未来は軽く寝返りを打ち、俺の方を向いた。

……寝顔が物凄く可愛らしい。独り占めしたい。

「……あれ？」

ふと、未来の髪に、黒い”影”的なものが見えた。
触ろうとすると、消えてしまった。

「なんだ？今の…。」

すると

「ん……あれ？ 紅丞先輩…？」

未来が起きてしまった。

「未来、大丈夫か？」

「え？ 何か、あつたんですか…？」

目をこすりながら未来が質問する。……めちゃくちゃ可愛い。

「いや、未来の髪に、黒い影のようなものが見えたから。」「影…ですか？」

「ああ。」

「……わかりました。」

未来は、かなり深刻な表情をしていた。

「あ、そうだ、先輩。」

「何だ？」

「お腹、空きません？」

「……確かに。昼も食べてないし。」

「じゃあ私、すぐ作りますね。」

「もう動いて大丈夫なのか？」

「はい、なんとか。」

未来は颯爽と立ち上がり、部屋を出でていった。

俺は、部屋で一人、考え方をしていた。

未来の髪に見えた黒い影……見覚えがある。

以前、似たような影が、グレイの羽にいるのを見たことがある。
グレイの羽……もしかして、あれが……カラス？
だとしたら、何故、未来の髪に？

考えていると

「紅丞、ちょっとといいかな？」

グレイが部屋に入ってきた。

「どうした？」

「実はさ、今、未来ちゃんがカラスの事について質問してきて……。」

「カラスの？ 何で？」

「……紅丞、未来ちゃんの髪に、黒い影のようなものが見えた、って
言つたよね？」

「ああ、確かに言つたけど……。」

「あれね……カラスなんだ、実は。」

グレイは比較的、真剣な顔でそう言つた。

「やっぱり、そうだったか。」

「知つてたの？」

「一度、グレイの羽にも似たような影を見つけたことがあるからな……多分そうじゃないかと思つて。」

「なんだ……でも、なんでカラスは、未来ちゃんに憑いてたんだろう？」

「そんなの、俺が知るわけないだろ……あ、そうだ、グレイ。」「何？」

「カラスって……どうして俺の前に姿を現さないんだ？」

そう言つた瞬間、グレイの顔が暗くなつた。

「それね……実はさつき、未来ちゃんがカラスにその事を聞いてたんだけど……どうやら、”紅丞に気付いてほしい事がある。”って言つてたみたいで……。」

「俺に……気付いてほしい事？」

「うん。それに、”紅丞は何か大切なことを忘れている。”とも言つてた。」

「大切な事……解るわけないだろそんなの……ヒントが無さすぎる。」「だよね……僕もそのことは指摘したよ。でも、カラスは何も教えてくれなくて……」紅丞なら思い出せる”って、それだけは言つてた。

「……どういうことだ？俺なら思い出せる？……もしかして、カラスは以前、俺と会つたことがあるのか？」

「どう？何が思い出せそう？」

「全然。それだけじゃ何も……ほかに何かヒントは？」

「もう無いよ。……カラスも意地悪だよね、素直に出てくればいいのに。」

「だよな……ところで、カラスってどんな見た目してるんだ？」

「確かに僕と同じくらいの身長で、子供みたいな顔してるよ。」

「それはグレイも一緒だろ。他には？」

「確かに一緒にいた……えっと、他には……そういうえば、悪魔つて、実態が無いらしいよ。」

「実体が無いって……黒い影のままで」とか?でも、確かに今、子

供みたいなつて……。」

「そうじゃなくて……なんていうのかな、その……悪魔つて、どうで生まれるかわかる?」

「解らない。」

「……えつとね、悪魔つて言つのは、人間の邪心……つまり、悪い心から生まれるんだ。それで、始めは、本当に”真つ黒な影”のような形なんだつて。

で、人間界で、自分の姿の元ネタを探し出して、それを元に姿を作つてから、魔界に行くんだつて。……カラスから聞いたから、本當かどうかわからぬけどね。」

「てことは、グレイの言う、”カラスの子供のよだな見た目”は、人間界で子供の姿を元に作つた……つてことになるのか?」

「うん。……多分だけどね。」

「……でも、どうして俺にそのことを話すんだ?」

「いや、それがね……紅丞つて、小さい頃、どんな子供だつた?」

「え?……普通の子供だつたと思つよ。よく遊んで、家の近くの公園とかに良く通り詰めてたし……でも、それがどうしたんだよ?」

「いや……なんでもない。」

グレイは目をそらした。

「どうしたんだよ?気になるじゃないか。」

「な、なんでもない……じゃあ、僕、ちょっと未来ちゃんのところに行つてくるね……。」

グレイはそう言つと、逃げるよつに部屋を出て行つた。
何なんだ? 一体……。

影？（後書き）

何故未来の髪に影が…？その理由はそのうち明らかになります。多分。

「グレイ、お前、ヒント『えすぎ。』

リビングに着いた瞬間に、僕の羽に憑依してのカラスに怒られた。

「だって……ねえ、カラス、何で紅丞の前に現れないの？」

「お前は知らなくていい。」

カラスは羽から抜けだし、そっぽを向いてしまった。

「カラス……僕のこと嫌いになつた？」

「……バーカ、んなわけあるか。ただ、アレだけは紅丞自身に思い出して欲しいだけだ。」

「……確認するけどさ、紅丞は小さい頃、カラスに会つたことがあって、紅丞がそれを思い出すまで、カラスは紅丞の前には現れない……つてことでいいんだよね？」

「そうだ。……紅丞なら、思い出せるはずだ。」

「カラスも変なこだわりを持つてるんだね……素直に出て来ればいいのに。……カラスなら、紅丞を人間に戻すことも出来るんだよね？」

「ああ。俺とグレイなら、紅丞を人間に戻すことが可能だ。でもその前に、紅丞には、”俺と会つた時のこと”を、思い出して欲しいと思っている。」

「……ねえ、カラス。どうしてそこまでこだわるの？思い出して欲しかつたら自分から言えばいいじゃん、なんなら僕が言つても。」

「ダメだ。」

カラスが僕を睨む。……思わず身体が竦んでしまった。

「紅丞自身が思い出せなきやダメなんだ。……もうこれ以上は詮索するな。」

カラスはリビングのソファに座つた。

「……カラス。」

「何だよ。」

「僕、カラスが思つた以上にいい子じゃないから、もしかしたら紅丞にカラスの事言つちゃうかも知れないけど、それでもいいの？」

「……言いたければ言え、俺は紅丞を人間には戻さないからな。」

「そんな……。」

僕個人の意見としては、一秒でも早く、紅丞を人間に戻して、普通の日常に返してあげたいところなのだが……カラスが賛成してくれない……どうして？

「……そういえば、未来はどこ行つたんだ？」

「え？……どこ行つたんだろ？……？」

「もしかしてあいつ、紅丞にこの事を伝えに行つたんじゃねえだろうな？」

「まさか、そんなこと……あるかも。」

ヤバい。紅丞に知られたら、紅丞を元に戻してもうえなくなる……。

僕はとつさに走り出し、紅丞の部屋に行つた。

「紅丞っ……！」

勢いよく扉を開ける。

「わつ！？……グレイ、どうしたんだ？」

部屋には、紅丞しかいなかつた。

「紅丞、未来ちゃん知らない？」

「え？……知らない、リビングにいるんじゃないのか？」

紅丞の言つてることは本当のようだつた。

「それが……リビングに行つたら、いなくて……勝手に帰つたなんて考えられないし……。」

「キッチンにはいないのか？」

「え？何でキッチン？」

「未来が、飯作つてくれるから、キッチンにいると思つんだが……。」

紅丞の家は、リビングとキッチンが別々に配置してある。

…… そういえばキッチンを見ていなかった。

「 もつか…… ありがとう、紅丞。」

僕は踵を返し、部屋を飛び出してキッチンへ向かった。

キッチンからは、何やら美味しそうな匂いが漂っていた。

扉を開けてみる。

「 あつ、グレイ。」

未来ちゃんはキッチンで炒め物をしていた。

「 未来ちゃん…… 探したよ。」

「 私を？ 何で？」

「 いや、なんでもない。…… 何作ってるの？」

「 何だと思う？」

未来ちゃんは笑顔で僕に問いかけた。

僕は未来ちゃんの持つフライパンを覗きながら答えた。

「 これ…… 野菜炒め？」

「 そう。…… 紅丞先輩、アレルギーとか無いよね？」

「 無い…… けど……。」

「 けど？」

「 …… いや、何でもない。」

「 ? …… 別にいいけど、もうすぐ食べるから、紅丞先輩呼んできて。」

「 うん。」

僕はキッチンをでて紅丞の部屋に行つた。

「 紅丞ー、『』飯だつてさ。」

「 おう。 内容は？」

「 行つてみてのお楽しみだよ、…… 多分。」

「 ふーん…… わかった。」

紅丞は複雑な表情を浮かべながら1階に下りて行つた。

妙なこだわりを持っているのは作者もカラスも一緒です。

テーブルの上に並べられた料理を見た瞬間、俺のテンションは一気に下がった。

「野菜炒めですか。」

思わず敬語になってしまつ程に。

「そうですけど……どうかしたんですか?」

「そう言えば、未来には話してなかつたな……。」

「未来ちゃん、あのね……。」

グレイが未来に耳打ちする。

「……え? そうなの?」

未来が驚いた表情を見せる。

「……でも、そんなの、別になんでもないじゃない。」

「いや、そうだけど、紅丞にとつては結構ハ[辛]ハ[つら]い事なんだよ。」

グレイが必死に説明している。

……勘のいい人ならわかるとは思つけど、俺がこの世で一番苦手とするのが 野菜。

正確には野菜料理全般ダメである。……びっくりするほどこの偏食なんだよね……俺。

「でも、もう作っちゃつたし……どうすればいいの?」

「残念だけど、紅丞には頑張つて食べてもらひつかなによ。」

「そう……だよね。」

未来とグレイが同時に俺を見る。

「……頑張るよ。」

「……どんな拷問だ、これ……。」

夕食（後書き）

私も野菜炒め駄目なんですよね…肉と一緒にいいんですけどね。

「疲れた……。」

俺は自分の部屋に入り、ベッドに倒れこんだ。

「……先輩、食事で疲れるとか聞いたことないですか？」

「いや、本当に野菜だけは昔からダメなんだよ……。」

「……先輩、1つ聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「先輩の両親は、先輩の野菜嫌いをどう思つてるんですか？」

「どう、って……父さんも母さんも、特に何も言ってなかつたよ。皿の隅に寄せて残したりしても、何にも言わなかつた。放任主義……つて奴なのかもな。」

「……そうですか。」

未来は複雑な表情を浮かべていた。

「でも、それがどうかしたのか？」

「いいえ、何でもありません。」

「ふーん……あ、そろそろ俺、風呂入らないと……。」

時間はもう8時を過ぎていた。

「風呂入るって言つても、断水しますし……どうするんですか？」

「家の近くの銭湯行く。」

「でも、その姿じや誰かに見つかっちゃうんじゃないんですか？」

「いや、あの場所、平日はほとんど人はいないんだよ。帽子でもかぶつていけば大丈夫。」

「わかりました。……その前に、先輩、1つ確認してもいいですか？」

「いいけど……。」

「じゃ、失礼します。」

「……」

「……」

「え！？……いきなりなんだよ！？」

俺は反射的に未来の両手を掴んだ。

「痛つ……先輩、離してください……。」

少し力を入れただけなのに、未来はかなり痛そうな表情をしていた。

「え？あ……ごめん。」

俺は手を離した。

「……先輩、言い忘れてたんですけど、先輩の身体は天使になつたことによつて、腕力とか握力とかが人間の時の約3倍になつているんで、ちょっと力を入れただけでも 結構痛いんですよ……だから、できれば気を付けてください。」

「そ、そなうのか？それはごめん……でも、いきなりボタン外しだすから何かと思って……。」

「それなんんですけど、先輩、背中見せてもらえます？」「別にいいけど……最初からそう言えよ……。」

「言つても見せてくれないかと思つて……すみません。」

俺は素直に服を脱ぎ、背中を見せた。

「……やつぱり、羽がありますね……。」

「え、羽？」

「気付いてなかつたんですか？」

俺は頑張つて背中に両を向けると……確かに、グレイと同じ、白い大きな羽がある。

「そなうか……身体が天使だから、羽があるのか……そりやそなうだよな……。」

「……気付いてなかつたんですね……。」

未来は呆れるように呟いた。

「だつて、グレイはそんな事、一言も……。」

「言われなくとも解るでしょ？？」

「いや、そうだけどな……でも、羽がどうかしたのか？」

「その事なんんですけど……羽がある状態では、お風呂に入りにくいくんじやないかな、と思つて……。」

「そなういえば、そなうだな……でもまあ、グレイからアドバイスを貰えば何とかなるよ。」

「不安ですね……」

「大丈夫だつて……未来は行かないのか?」

「私ですか?……じゃあ、一緒に行きましょつか?」

「てことは……2度目のデートか。」

未来が顔を赤くした。

「よ、余計な事言わなくていいいですから!……準備してきますね。」

未来は部屋を出て行つた。

悪戯

「あの……紅丞先輩。」

「何だ？」

「手、繫いでもいいですか？」

「えー？……い、良いけど……。」

「じゃあ、失礼します。」

未来は少々恥ずかしがりながら俺の手を握った。

今、銭湯からの帰り道。俺は天使の身体だから寒さを感じないので、普段着のまま出てきた。

だが、未来はそつはいかないのでコートを着てはいるものの、手袋を忘れたらしく、上記の会話に繫がる。

「先輩、手、暖かいですね。」

そう言いながら、未来は更に身を寄せた。

俺はと、

「そ、そつか？」

自分で解るほどに顔を真っ赤にし、俯きながら歩いていた。……
声が震えている。

「先輩、前見ないと危ないですよ？」

未来が不思議な顔をしながら俺の顔を覗く。

「い、いや、解つてる……。」

顔なんて上げられるわけないじゃん……こんなに近いのに……。

「もしかして……緊張します？」

未来の問いかけに、俺は小さく頷いた。

「そーですか……。」

未来は怪しげに笑うと、急に手を離し、あらつ事か俺の腕に抱きつくよつに腕を絡めた。

「つー？」

言葉がでない。思わず立ち止まってしまった。

「先輩？どうしました？」

未来は何くわぬ顔で俺に問いかける。……確信犯か。

「い、いや、その……なんでもない……。」

……俺も、素直に”未来のせいだ”って言えば良いのにな……。

「それじゃ、行きましょうか。」

未来は無理矢理、俺を引っ張りながら歩き出した。

悪戯（後書き）

仲良いですねー。腹立つ。

見学

「ただいまー。」
家に帰ってきた。…結局未来は、家に入るまでずっと腕を絡めたままだつた。

「あつ、暁文が来ますね……。」

未来が玄関の靴を確認しながらそう呟いた。

すると、リビングから暁文が現れた。

暁文は俺を見て少し驚いた顔をしたが、すぐに元に戻つた。

「……紅丞さん、お邪魔しています。」

暁文は律儀に挨拶をした。……未来曰く、普段の暁文は、”自分勝手で何を考えているのか解らない”という話らしいが、果たして本当だろうか？

吸血が自分勝手って意味だろうか？

「じゃあ、紅丞先輩、私、暁文とグレイに血をあげてくんで、部屋で待つてもらつても良いですか？」

「嫌だ。」

未来からの言葉に、俺は首を横に振つた。

「え……何ですか？」

「何でつて……いや駄目か？」

「駄目じゃないんですけど……。」

未来は気まずそうな顔をしている。

「俺は別に構いませんけど。……つていうか、未来、腹減つた。」

暁文がそう言つた。

「……。」

未来は複雑な表情で暁文に近付いた。

すると、暁文はいきなり未来を取り押さえるように抱きしめ、勢い

良く歯を刺した。

「うつ……。」

未来が苦痛の表情を浮かべる。

暁文はそのままがつつくよつて、吸血を開始した。なるほど、確かに自分勝手かもしれないな……。

吸血を開始した直後、未来の身体に変化が現れた。髪が短くなり、体格が男らしくなった。

「暁文……離せつ……。」

暁文に指示を出す未来の声は、男の声になっていた。

「んつ……。」

暁文は未来を離した。

「うつ……。」

未来は床に膝をついて座り込んでしまった。

「未来、大丈夫か？」

俺は素早く未来を抱きかかえる。

「あ……すみません、大丈夫です。」

未来は俺の肩を借りながら立ち上がった。

「暁文……ちょっと吸い過ぎなんじやないのか？」

未来が暁文を睨む。

「いや、性別が変わつてすぐ離したから、普通だと思つが？」

暁文は首をかしげながら答えた。

「……もういいや。グレイは？」

「リビングにいる。」

「解つた。」

未来は俺から手を離し、自分の足でリビングに行つた。

「……紅丞さん、お見苦しいところを見せてすみませんでした。」

暁文が申し訳なさそうに頭を下げた。……一応、自覚はしてゐた。いだ。

「別にいいけど……改善しようとは思わないのか？」

「いや、ああした方が飲みやすいんです。せめて未来がもう少し背
が高ければ負担が少なくなるとは思つんですが……。」

そういう問題か？

俺が疑問に思つていると

「紅丞ー、未来ちゃんが……。」

リビングからグレイが走つて來た。

「どうした？」

「未来ちゃん、僕が吸血したら、また倒れちゃつた……。」

「えつーー？」

驚く俺に対し、暁文は

「ああ……さつきも倒れたんで、問題ないですよ。」

そう言いながらリビングに行つた。俺も後に続く。

暁文はリビングに倒れている 既に性別が変わつてゐる未来を抱き
上げると、そのまま俺の部屋に向かつていった。

問題

さて、ここが問題だ。

普段自分の使つてゐるベッドに、恋人が寝てて、今自分が就寝するためのベッドが無い場合。君ならどうする？

『（・・・）はい。一緒にベッドに入ります。』

黙れ作者。俺にそんな勇氣あると思つてんのか。ていうか顔文字使うな。

……というわけで、今俺には寝床がない。

いや、あるんだけど、さつき暁文が未来を連れてきたときに、俺はつい”俺のベッドに寝かせといて”って言つちやつて……今、未来が占領してる。

「どおーすっかなあ……。」

未来はスヤスヤと寝息を立てており、全く起きる気配がない。

ぶつちやけた話、俺のベッドはダブルベッド。……高校入学の時に、広いベッドに憧れて親に買ってもらつたのである。

だから、俺が入れないわけではないのだが……流石に付き合ひ始めてまだ一日も経つていない状態で添い寝は無いだろうと本能的に判断した。

うーん……でも、正直な話、俺はこのベッドじやないと寝られないのだ。……あれだ、枕変わると寝られない人みたいな……解る？

ベッドの横にしゃがみ、未来の顔を眺める。

……可愛い。めっちゃ可愛い。全然飽きない。眺めているだけで朝

が来そうだ。

すると

「……あれ？」

未来が目を覚ました。

「あつ……紅丞先輩……」

目を擦りながら身を起こす。

「おう、起きたか。」

「はい……今何時ですか？」

未来からの質問に、俺はベッドの近くに置いてある目覚まし時計を指さした。

「……え、もう一〇時ですか！？」

実は未来が眠つてから、大体1時間ぐらい経つている。

「それは……すみませんでした。ベッドまで借りちゃって……。」

未来はフランフランしながらベッドから降りた。

「それで、あの……先輩。私は今日どこで寝ればいいんでしょう？」

「そうだな……来客用の部屋があるから、そっちでもいいか？」

「はい、平気です。」

「よし、じゃあ案内するよ。」

俺は未来を連れて部屋を出た。

問題（後書き）

紅丞だつて顔文字使つてゐるじょんかよー……。

「先輩、紅丞先輩つ、起きてください……」

「うーん……朝っぱらから騒がしい……」

薄らと目を開けてみると、未来が青ざめた表情でじっと見ていた。

「…………うおっ！？」

俺は慌てて飛び起きた。

え！？ 何で未来が俺の家に！？

「あ、そうか、確か昨日、未来に告白されたんだっけ……忘れてた。大事な事なのに……」

それよりも

「……あれ？」

身体が、縮んでいた。大体グレイと同じくらいの大きさ……。服がブカブカになつていてるのですぐ解る。

「え……何で？」

「先輩、それ、こっちのセリフです……。昨日、何があつたんですか？」

未来は心配そうな表情でこちらを見ている。

「いや……昨日は普通に寝てたけど……どうこいつことだ？」

俺が疑問に思つていてると、未来は指を額にあててふむふむと考え出した。そして

「……先輩、もしかすると先輩は元々、寝てる間でもストレスが溜まる体質なんじゃないんですか？」

「そつ……なのか？」

「他に理由が思い浮かびませんよ……こんなに縮んじゃうなんて……」

未来は俺を軽々と抱きかかえ、立ち上がった。

「本つ当に、目が離せませんね…。」

呆れたよつこそつ呟くと、俺に顔を近付け、キスをした。

「ん……。」

右手で身体を支え、左手で頭を固定している。……結構手馴れてるな、こいつ。

数秒後、身体の大きさも元に戻り、すっかり目が覚めた。

「はあ……腹減った…。」

「じゃあ、朝ご飯にしましょうか。」

「えつと……ちなみに、内容は?」

「そうですねえ…先輩って、朝はご飯派ですか?パン派ですか?」

「野菜が出ないならビックリでも。」

「……私が作る朝食はどっちも野菜が入ってるんですけど。」

「ええー……?」

「嫌なら食べなくていいですよ?」

「…食べる。」

「じゃ、行きましょうか。」

未来は俺の手を掴むと、そのまま歩き出した。

2日目（土曜日）（後書き）

ほぼ1週間毎朝トーストにチョコ塗ったやつ食べてた小学校時代。

仕方ない嘘

「はい……はい。……そのことなのですが……。」

朝7時。朝食を食べ終え、俺は今、家の電話から学校に電話をかけている。

昨日の無断欠席の事で、先生に理由を話していたのだ。
……とはいっても、”天使になりました。”なんて本当の事言える
わけない。ので

「実は、昨日、いきなりインフルエンザにかかりちゃいまして……。」

時期は軽く過ぎていいとはいって、まだ寒い。ありえない話じゃない。
それに、インフルエンザだと偽れば、強制的に1週間は休みを与え
られる。……これはいい作戦だ。提案したのは未来だけ。

「はい。気をつけます……それでは、失礼します。」

俺はゆっくりと電話を切った。

「……ふう。」

「先輩、終わりました?」

後ろから、未来が食器を洗いながら声をかけてきた。

「ああ、何とかバレずにすんだよ。」

「それはよかったです。……バレると大変ですもんね。」

未来ははにかみながら答えた。

俺が天使になつて、早一日。水道工事が終わり、蛇口からは水がで
るようになった。

これが後一日早ければ、俺が天使になることもなかつたんだがな
……。

「紅丞、未来ちゃん、おはよー。」

グレイが田を擦りながら眠たそつにリビングに入ってきた。

「おはよー。今日は早起きだな。いつもは8時くらいに起きるはずなのに。」

「うん……お腹すいちゃつて……。」

グレイはゆつくつと未来に近付く。

「グレイ、ちゃんと吸血させてあげるけど、その前に顔洗つてきなさい。」

未来が素早く指示を出した。

「はーーー……。」

グレイは田を擦りながら、そのまま真っ直ぐ洗面所に行つた。

「未来……ずいぶん手慣れてるんだな。」

「え? 何がですか?」

「いや、確かに未来つて小さい子供が苦手だったんじゃなかつたか?瀬夏にあつた時もそんな感じのこと言つてたし……。」

「ああー……もう慣れました。瀬夏のおかげで。」

そつ言いながら、未来は食器を拭き、棚に戻した。

「未来ちゃん、顔洗つてきたよー。お腹すいちゃつた。」

グレイが洗面所から早歩きで戻つてきた。

「解つてる解つてる。」

未来はグレイの前にしゃがむ。

グレイは元からある未来の首筋の噛み痕に、合わせるよつて歯を刺した。

「うつ……。」

未来の表情が苦痛で歪む。が、すぐに元に戻つた。

血を吸い始めた直後、未来の身体に変化が現れた。

髪が短くなり、顔つきが男らしくなっていく　やつぱり、何度見ても不思議だ。

数秒後、性別が男になり、グレイが未来から離れた。

「「」ちそうさま、未来ちゃん。」

グレイの瞳は、血を吸つて満足したからか、綺麗なピンク色だった。その時

ピンポーン

家のチャイムが鳴つた。

「あ、俺出ます。」

未来はそつ言いながら玄関に行つた。

「紅丞先輩、手紙来てますよ。」
未来が小さな封筒を持ってリビングに戻ってきた。
だが、何かが変だった。

「先輩、これ……差出人の名前書いてないですよ。」
封筒には、差出人の名前どころか、消印も切手も無かつた。
「何か……怪しいな。」

とりあえず手紙を受け取る。

「配達員の人に訊いても、”わからぬ”って言われちゃいまして
……どうしましよう?」

「そうだな……。」

悪戯かもしれないが、大事な内容の手紙かもしれないし……うーん

…。

「紅丞、どうしたの?」

悩んでいると、グレイが後ろから声をかけてきた。

「グレイ、これ、どう思う?」

俺はグレイの頭上で手紙をちらつかせる。

「うーん……消印も切手もないのは変だね……ちょっと貸して。」

グレイは軽くジャンプし、俺の手から手紙をひつたくつた。

「あっ、おい」

グレイは手紙をまじまじと眺めると、いきなり封筒を開け始めた。

「「あっー。」」

驚く俺と未来を後目に、グレイは封筒の中からあるものを取り出した

「それ……カードか?」

「みたいだね。」

一つ折りのカードのようなものが入っていた。

「えーと……あつー！」

グレイがカードを広げた瞬間、歓声のような声を上げた。たちまち、
グレイの瞳がピンクになる。そして

「これ、姉ちゃんからだーー！」

突如、そう叫んだのだった。

「ちょっと待てグレイ、お前、姉がいるのか?」

未来からの質問に、グレイは少し驚いたように返した。

「あれ? 言つてなかつたつけ?」

「言つてねえよ、初耳だ。」

確かに、俺も初耳だ。グレイに姉がいたなんて…。

「姉ちゃんつて言つても、腹違いの姉ちゃんなんだ。パパが同じつてだけで。」

「……でも、なんで姉からの手紙だつてわかつたんだ?」

「字を見て解つたんだよ、ほら。」

グレイはカードを俺たちに見せた。

カードには、まるで「シック体のよくな綺麗な字で、グレイの安否を気遣う文面が書かれていた。

そして、最後に一言 佐川家にお邪魔します。と書いてあつた。てことは…

「もしかして、グレイの姉が俺の家に来るつてことか?」

「そう言つことになるね。」

「でも、なんで急に?」

「解んない……姉ちゃん、結構気まぐれなんだよね…。」

「ふーん……。」

と、じじじで一つ気になることが。

「……何時、来るんだ?」

手紙には家に行くとだけ書いており、時間や日時なんかは一切記載されていなかった。

「それはわかんない。今かもしれないし、明日かもしれないし

」

その時。

ピンポン

再び、チャイムが鳴った。

「まさか……な？」

俺はグレイに目配せする。

「まさか……ね？ちょっと待つてて。」

グレイと未来が玄関に向かう。俺も後に続く。グレイが恐る恐る扉を開ける。そこにいたのは

コートを着た、グレイによく似た顔立ちの、目が赤く肌が白い、ロングヘアの背の高い若い女性だった。

疑問（後書き）

私も姉が欲しいです。兄しかいないから。

姉

「グレイ一っ……久しづりー……」

女はグレイを見るなり、いきなり抱きしめた。

「むぎゅうつ！？」

あまりの出来事に、グレイは変な声を出しながら汗でしまつていった。

「わあーっ、暖かーい……本当に久しづりだねえ……」

妹との再会に喜ぶ姉。だが、肝心の妹は

「むぐつ……姉ちゃん……苦し……」

抱きしめられてる際に、気管を圧迫されているのか、ジタバタと手足を動かしながらもがいでいる。

「あっ、『めん』めん。」

女はすんなりとグレイを離した。

「げほっ、げほっ……ひ、久しづりだね……姉ちゃん……」

グレイは、疲れ切った顔のまま、女に挨拶した。

そんな様子を、俺と未来は畳然とした表情で眺めていた。

「えつと……僕の姉ちゃん、メルって言つんだ。僕と同じ、天使の血が混じつた吸血鬼だよ。」

グレイは自身の姉を紹介してくれた。

「どうも、佐川紅丞です。」

「安藤未来です。」

俺と未来は同時に頭を下げた。

「あつ、別に、敬語じゃなくて良いよ。私、敬語あまり好きじゃないし。」

メルは恥ずかしそうに答えた。

「……で、グレイ。」

「何？姉ちゃん。」

「どっちがグレイのパートナーなの？」

「メルは俺と未来を交互に見ながら質問した。

「えっと……紅丞が、僕のパートナーで、未来ちゃんが、アカツキのパートナーなの。」

「へーえ……。」

それを聞き、メルは俺に歩み寄った。

「いつも妹がお世話になってるね。ありがとう。」

そう言いながら、メルは俺に手を差し出した。

「あっ……ああ。」

俺も素直に手をさしだし、メルと握手した。

「……ところで、姉ちゃん。どうしていきなり紅丞の家に来たの？」

グレイが一番気になつていてることを聞いた。

「それがね……。」

メルは俺を見ながら「うう」と言つた。

「あなたの事で、ちょっと話があつてね。」「え？……俺の事？」

姉（後書き）

メルは今作ではあまり登場しないです。むしろ、次作で結構出でてくるので、メルの紹介はそっちで行います。

「話の前に……」「めんなさい。妹の不注意で、あなたをこんな姿にしてしまって……私からも謝るわ。」

そう言いながら、メルは深く頭を下げる。

「いや、顔上げてくれよ。何も、グレイだけが悪い訳じゃない、つていうか、大体俺のせいだから……。」

メルは申し訳なさそうに頭を上げた。

「妹から一応話は聞いたけど……確かに、3割は人間……なんだよね?」

「ああ、グレイがそう言つてた。残りの3割は臓器の事だつて……。」

「そつか……。」

「でも、それがどうかしたのか?」

「いや、ちょっと言つづらいんだけど……。」

躊躇しつつも、喋り始めようと/or>するメルを、グレイが止めた。

「姉ちゃん、待つて。それは……言つちやだめだと思つ。」

「え、でも、言つておいた方がいいと思つんだけど……。」

メルは相当戸惑つているようだつた。

「……ちょっと待つてくれ、言つづらじつてなんだよ? 気にならじやないか。」

「いやつ、紅丞は気にしなくていいよ。ちょっと、席、外してもらつてもいい?」

「え? 何でだよ。」

「いいから……姉ちゃん、先に未来ちゃんに話してて。」

グレイの言葉に、メルは小さく頷いた。

「ほり、ちょっと向こう行つて。」

グレイは俺の手を引っ張る。俺は引きずりれるよつてコピングを出た。

「おい、グレイ……ちょっと待てって。」

俺はグレイに、無理矢理部屋に連れてこられた。

「紅丞、その……姉ちゃんが言おうとしてたこと、僕から説明させてもらつてもいいかな?」

グレイは寂しそうにそう言つた。瞳は青色だった。

「別にいいけど……そんな衝撃的な話なのか?」

「うん。……紅丞が天使になつた時さ、僕、”残りの3割は、臓器のことかもしない。”って言つたでしょ?」

「ああ。確かにそう言つた。」

「何か、おかしいとは思わない?」

「別に……どこもおかしいなんて思わないが?」

「本当に? 良く思い出してみてよ。」

うーん……残りの3割が臓器なのが、そんなに変なのか?
悩んでいる

「紅丞、もしかして、”臓器全てが人間のまま”だと思つてる?」

グレイが、恐る恐るそう訊いた。

え?

「え、だつて……違うのか?」

「……違うよ。」

「ちょっと待て、どうこうことだ?俺、まさか、嘘をつかれてたのか?もしかして、俺の臓器、全部天使なのか?」

「落ち着いて、紅丞。ちゃんと説明するから。」

グレイはその場で深呼吸をし、俺の目をまっすぐ見ながら語り始めた。

「紅丞の身体は、僕の血の影響で、見た目はほぼ完璧に天使になってしまったけど、臓器は別。でも、臓器全てがたった3割なんて、おかしいとは思わない？」

「……もうわかつてるとかもしれないけど、紅丞の身体に残る3割の要素は、臓器のほんの一部……正確には、心臓、肺、脳の3つだけなんだ。」

軽い説明。……でも、俺には一方的なマシンガントークに聞こえた。臓器の、ほんの一部……俺には……今の、佐川紅丞の身体には、それしか残されていない。

「何で……。」

「……紅丞？」

「何で、昨日、言つてくれなかつたんだよ……？」

俺、ずっと、臓器全てが人間のままだと思つてたんだぞ？ それなのに……ショックが大きすぎる……。

「……ごめんなさい。」

グレイは、今にも泣きだしそうな声で謝罪した。

「謝つて済む話じゃないだろ……。」

その時

「うつ……。」

身体に電流が流れる感覚。思わず、両腕を抑えながらその場に膝をつく。

そして、身体が縮み始めた。

「紅丞つ！？」

グレイが俺の身体に触れる。でも、収縮は止まらない。

「どうしよう……ちょっと待つて……！」

グレイは俺を置いて、勢いよく部屋を飛び出していった。

「未来ちゃんっ！！」

リビングで、メルから話を聞いてると、グレイが階段を下りてきた。

「グレイ、一体どうしたんだ？」

グレイはかなり焦っているようだつた。

「紅丞がつ……紅丞が縮み始めた！！」

「えっ！？」

俺とメルは同時に声を上げた。

「速く！！急いで来て！！！」

俺はグレイと一緒にリビングを飛び出し、階段を駆け上がつた。

部屋に到着し、勢いよくドアを開けると、紅丞先輩が部屋の真ん中で扉に背を向けるようにしてうずくまつっていた。身体がグレイよりも小さくなつていた。

「紅丞先輩っ！！！」

後ろから駆け寄り、肩に触れる。

収縮が止まつた。男の状態でも大丈夫なようで、少し安心した。

先輩の身体は、小学生よりも小さい、赤ちゃんぐらこの大きさしかなかつた。

「先輩っ……。」

俺は後ろから先輩を抱きしめる。……男同士だと、そういうのは眼中になかつた。

「未来……。」

先輩が俺の名を呼ぶ。

「……何も言わなくていいです。何が言いたいのかは大体わかりますから……。」

そう、恐らく、グレイから臓器の事について聞かされたのだらう。

俺も先ほどメールから聞いた。

：確かに、今の先輩にはショックな事なのかもしれない。こんなに縮んでしまったのも頷ける。

「ううつ……。」

先輩は俺の腕にしがみ付き、悔し涙を流していた。

「未来、お前から呼ぶなんて珍しいな？」

「ああ。もう毎過ぎだつていうのに、全然暁文が来ないから、ちょっと不安になつて……。」

「あー……毎過ぎまで寝てたんだ。悪かつたな。通りで腹が減つてるわけだ。」

暁文は、そう言いながらリビングへと歩いて行つた。

あの後、紅丞先輩を元の大きさに戻すため、念のために女になつた方がいい、ということで、急遽暁文に来てもらつた。

暁文は暁文で来るの遅いし、先輩も先輩で、暁文に小さい姿を見られるのは嫌だとか言つて、もうわけわかんなかつた。

「じゃ、せつかく呼んでもらつたんだし、とつとと始めるか。」

そう言つて、暁文は俺に近付き、肩を抑え、噛み痕に歯を刺した。

「うつ……なあ、暁文、今日は少し急いでるから、出来れば性別が変わつたらすぐ離してくれないか？」

「ん……解つた。」

暁文は軽く返事をすると、ふうーっと息を吐ききり、一気に吸い付いた。

「うあつ……！？」

あまりの出来事に、声が出ない。

……苦しい。心臓が飛び出そくなぐらい鼓動を速めている。

「あ……暁文……も、少し、ゆつくり……。」

なんとか声を絞り出す。

すると、暁文が吸血を中断した。

「……急いでるんだつたら、と思つてやつてたんだが……。」

そう言いながら首を傾げる暁文。

「……そこは普通でいい……。」

俺は呆れながら答えた。

「……解った。」

暁文は、今度は優しく吸血してくれた。

性別が完全に切り替わると、暁文は私を離した。

「……なんか、今日はやけに優しくない？」

「ああ。今日は昼までぐっすり寝ることができたから、気分がいいんだ。」

確かに、我が家にいるときは、朝はいつも暁文を叩き起こす事から始めていた気がする。なるほど、そういうことか。

「じゃ、グレイを呼んでくるね。」

私はリビングを出て、紅丞先輩の部屋へと向かつた。

「紅丞先輩、お待たせしました。」

先輩は、部屋のベッドの上でグレイと一緒に私を待つていた。

「未来ちゃん、遅かつたね。」

「ごめん、暁文の吸血が長くて……グレイ、暁文が下で待ってるよ。」

「はーい。」

グレイは元気に応えると、私の横を通り過ぎ、部屋を出でいった。

「さて……。」

先輩を元の大きさに戻すため、私は先輩に近付く。

「……なあ、未来。」

「何ですか？」

「いつも、『ごめんな……俺なんかのために……』」

先輩はさつきから元気がなく、瞳が青いままだつた。……恐らく、臓器の話をまだ受け入れられないのだろう。

「いえ、私はただ、恋人に対して当然のことをしていくだけです。」

先輩の頭を撫でながら答える。 天使は、頭を撫でられるのが好きだと、グレイから聞いた。

「…………ありがとう。」

瞳の色が青からピンクにかわり、目が徐々に涙目になつていいく。

「先輩、前向きに考えましょ？……たつた3割でも、先輩の中に入間の要素があることには変わりないんですから。」

語りかけるように囁く。

「未来つ…………。」

先輩の目から涙が零れた。

私は先輩を抱きしめる。……軽い。こんなに軽くていいんだろうか。

「…………先輩、暖かいですね。」

「天使だからな…………。」

「私、少し不謹慎かもしれないんですけど、先輩が天使になつて、ほんの少し感謝してるんですよ。」

「え？…………どういう事だよ？」「

「だって、そのおかげで、こうやって常に一緒にいることができるんですから。」

「そう…………かもな。」

先輩は少し嬉しそうに答えた。

私は先輩を抱いたまま、キスをした。

ドクンッ 先輩の身体が、正確には心臓が、大きく脈打ち、成長を始めた。

羽 その2（一部性的表現注意）

「ふう……。」

身体の大きさが元に戻り、未来は俺を離した。
その瞬間

「いいねー、青春だねー。」

後ろから聞こえた声に、俺と未来は音速を超える速さで振り向いた。
そこには、俺たちを部屋の入り口から一矢一矢しながら眺めている
メルがいた。

「メル！？ 何時からそこそこー？」

未来が驚きの声を漏らす。

「何時からって……キスする、20秒前くらい？」

メルは指を顎にあてながら答えた。

……見られた。キスしてるとこを見られた。めっちゃ恥ずかしい
……。

恥ずかしいと思つ氣持ちは未来も同じだつたようだ
「あ、あの、メル……できれば、暁文たちには内緒にしてほしいん
だけど……。」

赤面しながらメルに頼み込んでいた。

「解つてるよー。」

解つてるとは言いつつ、ニヤニヤしつぱなしのメル。…本当に内緒
にしてくれるのでうか？

「まあそれはいいとして……未来にちょっと面白いこと教えてあ
げようと思ってね。」

「面白い事？」

「そう。」

メルは未来に近付き、何かを耳打ちした。

「え！？」

その瞬間、未来は今までにない驚きの表情を見せた。

「そ、そうなの？」

未来は驚いた顔でメルに尋ねる。

「うん。天使はみんなそうみたいだよ？」

メルはニヤニヤしたまま答える。

「へえー……。」

未来は驚いた顔のまま、俺を見た。

「な、なんだよ？何の話をしたんだ？」

めっちゃ気になる。

「それは、その……。」

未来にしては珍しく、言つのを躊躇つていうようだった。

「紅丞つ、羽、出してみて。」

未来よりも先に、メルが俺に指示を出した。……心なしか、目が輝いているように見える。

「え、なんで羽？」

「いいから、ほらつ。」

「……解つたよ。」

渋々服を脱ぎ、羽を出す。

「えーと……えいつ。」

メルは俺の羽にゅつくつと手を伸ばすと、いきなり羽をつまみ上げた。

その時

「つあつー？」

身体中に電流が流れる感覚がした。でも、身体は縮まなかつた。

「え……？」

身体が縮むときは、電流が流れる感覚がした後、言葉に言い表せないような恐怖に襲われるのだが、今のは違つた。

何て言うのか……言葉に言い表せないような快感のよつな何かが今
の俺にはあった……ような気がする。

「な、何だ? 今……。」

唖然とする俺。

「ほらね?」

そんな俺を後日に、未来に向かつて微笑むメル。

「う、うん……。」

困ったような、驚いたような顔をする未来。

「一体どうなってるんだ?」

「実はね……。」

メルは俺にそつと耳打ちした。

メルから聞いたその言葉は、信じられないものだった。

天使は皆、羽に“あるもの”がついていると言われている。

老若男女問わず、それは同じらしい。

そして、その“あるもの”とは……

……いや、俺だって、自分が何言つてんのかわかんねえよ。初耳だ
し、グレイはそんなこと一言も言つてなかつたし。

「な、なんで、そんなものが羽に……?」

「解らない。グレイも羽に性感帯があるらしいけど、何であるのか
は解らないらしいよ?」

メルは腕を組みながら答えた。

性感帯。

「それにも……不思議ですね、羽に性感帯があるなんて……。」
「今度は未来が、俺の羽を指で軽く突いた。

「あうっ……！」

上擦った変な声とともに、俺の身体がビクッと痙攣した。

「あっ、すみません。」

未来は慌てて俺から手を離した。……心なしか、笑つてるように見えるのは気のせいだろうか？

「……でも、こんなんで生活に支障は出ないのか？」

「出ないらしいよ？グレイが言つには、だけど。」

「メルには羽は無いのか？」

「無いよ。私は、グレイとは腹違いの姉妹なの。グレイの場合は、母親が吸血鬼と天使のハーフで、父親が天使なんだ。で、私は、母が普通の吸血鬼なの。」

……簡単に言つと、グレイの中には天使の要素が7割混じってて、私の場合は5割。だから、見た目や中身に結構な差が表れてるんだ。ほら、私、感情で瞳の色が変化したりしないでしょ？それに、グレイと違つて、太陽にも弱いんだよ。」

メルはハキハキと笑顔で説明してくれた。……なるほど、通りで、コートを着てきたわけだ。

「だから私は、羽が無いからこうこう風になる」ともないんだよつ。

「メルは素早く俺の後ろに回り込み、いきなり両手で両羽をつまみ上げた。

「んあっ……！」

またしても変な声が出た。

「あっははは。面白いねえ。」

メルは子供のように笑いながら、俺の羽をいじりまくる。

「あうっ……や、やめろっ……！」

堪えられなくなり、上半身裸のままベッドを飛び出す。

「待つてよ、紅丞えー。もう少しだけー。」

メルは両手を前に突き出し、「いやいやしながらジロジロと歩み寄つてきた。

「やめろひー！意味わかんねえよーーー。」

メルから逃げるよつに後ずさりしながら答える。

そんな中、未来は

微笑みながらその光景を眺めていた。

「……おい、未来！何とかしろよーーー。」

「いや、楽しそうだなーと思いましてーーー。」

「これのどじが楽しそうなんだよーーー。」

反論していると、メルが素早く俺の後ろに回り込み、俺を羽交い締めにする。

「捕まえたあーーー。」

「つわあああつーーー。」

その後、メルに散々羽を弄されたのは、言つまでもない。

怒り

「……メル、そろそろいいんじやない？」

「そうだね。」

メルはゆっくりと先輩の羽から手を離した。

「はあ……はあっ……。」

息を切らしながら、先輩はその場にへたり込む。

先輩は、メルに散々羽を弄ばれ、疲れ切った顔をしていた。

……にしても、紅丞先輩つて、結構可愛らしい声出すんだなあ……なんか意外だ。

「いつの言ひつけ、”萌え”って言ひんだけ?……私には解らないけど。」

「…………。」

先輩は無言でベッドに走り、その上に置いてあつた衣服を分捕ると、素早い手つきで服を着た。

「あつ、紅丞、何で服着ちやうの?」

メルが少し残念そうに訊いた。

「弄られたくないからだよ!……」

紅丞先輩はメルを睨みながら答えた。……かなり怒っているようだ。瞳が赤い。

「もー、そんなに怒らないでよ。ただのジョークじやん。」

メルは頬を膨らませながら呆れたように答える。

「あれのどこがジョークなんだよ……。」

先輩は怒り心頭のまま呴いた。

「ま、まあ、良いじやないです。メルだつて悪氣があつてやつたわけじやないですしつ。」

私は咄嗟に宥めようと声をかける。

「止めなかつた癖に。」

紅丞先輩の呴きに、言葉がでなかつた。

「そ、それは、その……」

何か、何か言わないと……。

「先輩の嫌がる声が可愛くて……つい……。」

思わず本音を言ってしまった。

「えつ……あ、ありがとう。」

先輩は、少し頬を赤くしながら、答えてくれた。……つか、何故お礼？

「んじゃつ、私、そろそろ帰るわ。」

暫くの沈黙の後、メルがいきなりそう言つた。

「え、もう帰っちゃうの？……もう少しゆっくりして行けばいいのに。」

「『めん、未来。私にも都合があるのだよ、都合が。』

メルは寂しそうに答える。

「それじゃ、またね。」

笑顔で手を振り、颯爽と部屋を出ていった。

「よ、良かつた、助かつた……。」

先輩は少し安心したようだ、小さくため息をつきながらベッドに座つた。

「……先輩、”助かつた”って言ひ方はないんじやないんですか？」

軽く先輩を睨む。

「だつて、羽いじつてきたし……未来は助けてくれなかつたし……。」

先輩は目を逸らしながら呟く。

「ですから、それは、先輩の嫌がる声が可愛かつたからであつて……。」

「だからつてなあ……。」

先輩は私に背を向けてふてくされてしまった。

先輩の背中……私も実は、少しだけあの羽に興味がある。
私は後ろから先輩に近づき、服の上から羽に触れた。

「ひやうつ……」

先輩が、また可愛らしい声を出した。

「未来つ、お前まで何するんだよ！？」

物凄く驚いた表情で、先輩が私を見てい。

「いや、その、ちょっと出来心で……。」

だ、ダメだ、笑いが堪えられない。

「未来、お前、何笑つてんだ？」

「す、すみません、ちょっと可笑しくつて……あははつ……だって、

”ひやうつ！！”つて……。」

「お前なあつ……。」

「すみません、もうしませんから……あははつ……。」

その後、怒り心頭な先輩を後目に、私は終始笑いつぱなしだった。

2度目の夕飯

夜。

先輩の機嫌も治り、ようやく夕飯へと漕ぎ着けた。

今日のメニューは、先輩を上機嫌にさせるため、ハンバーグにした。

……先輩は、昨日とは違い、そりやあもう笑顔で、瞳を綺麗なピンク色にして、箸を進めていた。

「美味いっ！！」

何口か食べては、感想を言う先輩。なんか、見てて面白い。

「ありがとうございます、先輩。」

瀬夏が天界に帰つてから、なかなか自分の料理を振る舞う機会がなかつたから、正直言うと嬉しいが、少し恥ずかしい。

ふと、そんな先輩を、離れたソファから心配そうに眺めるグレイが目に入った。

「グレイ、どうかした？」

私がそう訊くと、グレイは首をぶんぶんと横に振った。

「何でもない、気にしないで。」

そう言つと、立ち上がり、逃げるよつてリビングから出て行つた。

……何だろう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6191z/>

人間天使と性別人間

2011年12月21日21時59分発行